

山梨県東八代郡豊富村

# 高部宇山平遺跡

1993

豊富村教育委員会

山梨県東八代郡豊富村

# 高部宇山平遺跡

1993

豊富村教育委員会

## 序

山梨県東八代郡豊富村は、曾根丘陵を中心に、遺跡や古墳が密集して分布している歴史的環境に恵まれており、丘陵地より眺める南アルプスや八ヶ岳は、大へん美しく自然の豊かなところであります。

現在、豊富村では、21世紀を目指した田園都市づくりとして“パストラル・シティ豊富”を第2次総合計画として推進しております。その事業の一ひとつと致しまして人口の減少化を押さえるために、住宅用地の確保に努め、宅地開発の計画を推進しております。宇山平一帯がその予定地として選定されました。

宇山平は、王塚古墳をはじめとし、今回の高部宇山平遺跡など、埋蔵文化財が広く分布している地域として知られております。そこで、豊富村教育委員会では、平成2年度より、宅地開発がはじまる前に、事前に埋蔵文化財の範囲を確認すべく発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成4年度に実施した高部宇山平遺跡の成果をまとめたものです。今回の調査で、縄文時代から古墳時代にかけての土器や住居址・土坑の他、古墳時代と思われる方形周溝墓や古墳の周溝が検出されました。特に方形周溝墓の検出は、村内では初めての川土例であり、有意義な成果を得ました。

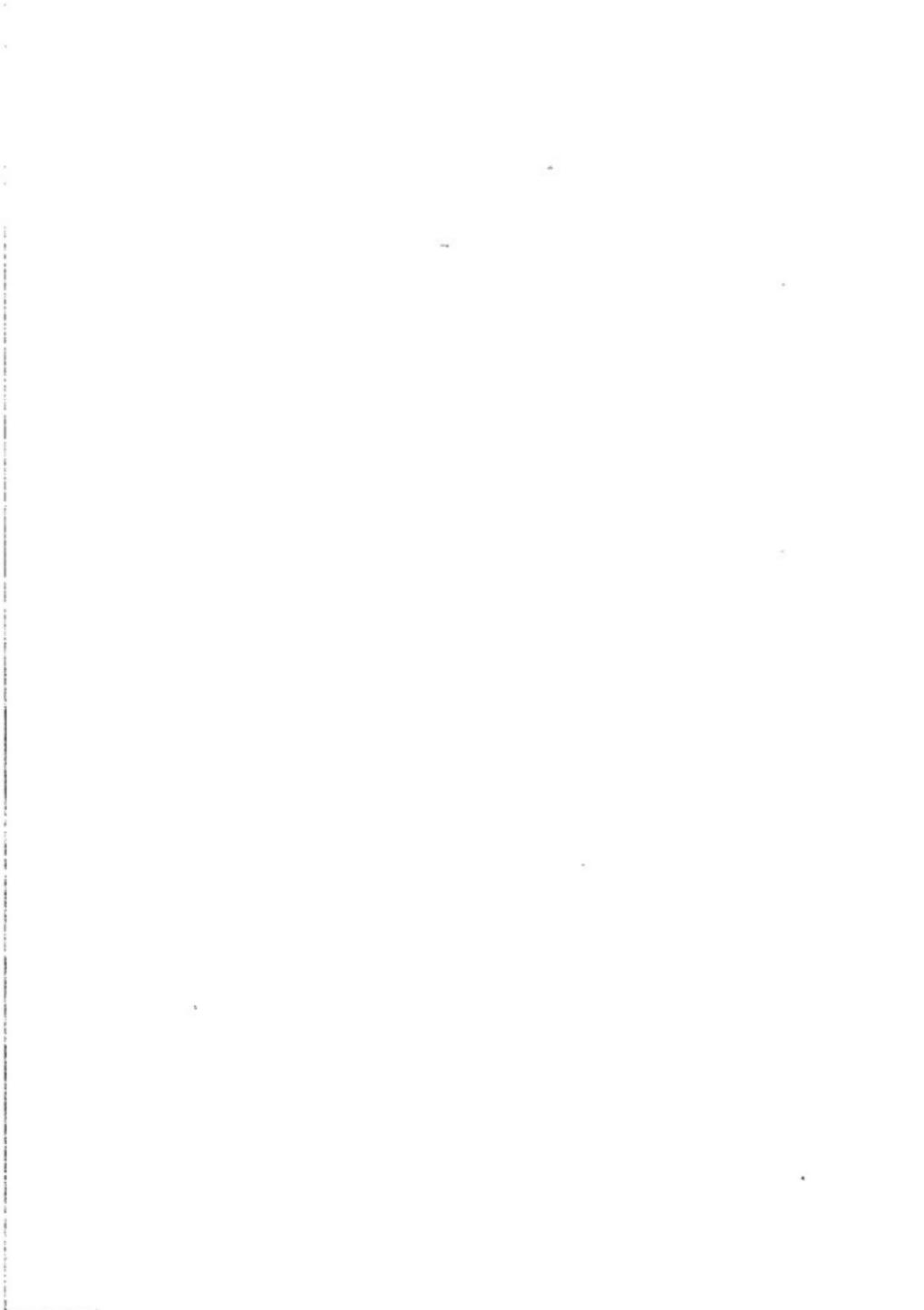
なお、今回の調査にあたり、御指導・御協力をいただきました地元地権者の方々をはじめ関係各位に厚く感謝申し上げます。

本報告書が、今後、有意義に活用されることを希望致します。

1993年3月31日

豊富村教育委員会

教育長 渡辺昭雄



## 例　　言

1. 本書は、平成4年度に発掘された山梨県東八代郡豊富村に所在する高部宇山平遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、文化庁・山梨県より補助金を受けて、豊富村教育委員会が実施した。
3. 発掘調査及び出土品の整理は、豊富村教育委員会で行った。
4. 本書における出土品及び記録図面・写真は、豊富村教育委員会が保管している。
5. 本報告書の執筆・編集・写真撮影は、岡野が行った。
6. 発掘調査・出土品等の整理及び報告書の作成については、次の方々の御協力・御教示を賜った。記して謝意を表する次第である。  
(敬称略)  
小野正文・長沢宏昌（山梨県教育庁学術文化課）、末木健・新津健・坂本美夫・保坂康夫・米田明訓・中山誠二・三田村美彦・今福利惠・小林健二（山梨県埋蔵文化財センター）、林部光（中道町教育委員会）、瀬田正明（駿迎堂遺跡博物館）
7. 本調査にあたり、山梨県教育庁学術文化課及び地元高部区の皆様に御理解・御指導をいただいた。心から謝意を表する次第である。

## 調　　査　組　織

調査主体	豊富村教育委員会
調査担当者	岡野秀典
事務局	渡辺昭雄（教育長）・中込清彦（教育課長）・田中正八（社会教育係長）・今井賢・有泉妙・河野義男・大村俊枝
調査参加者	有泉日那代・石原次代・石原花子・桜井幸子・殿岡常雄・中沢清・菜袋晴美・山口清子
整理参加者	石原次代・石原花子・桜井幸子・菜袋晴美・山口清子

## 目 次

### 序

#### 例言・調査組織

第Ⅰ章 調査に至る経緯	6
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	7
第Ⅲ章 調査の経過と成果	10
第Ⅳ章 遺構と遺物	21
第1節 繩文時代の遺構と遺物	21
第2節 弓生時代の遺物	24
第3節 古墳時代の遺構と遺物	24
第4節 その他の遺構	33
第Ⅴ章まとめ	52
第1節 繩文時代について	52
第2節 弓生時代について	53
第3節 古墳時代について	53
引用・参考文献	55

付編1 平成2年度高部字山平遺跡の調査

付編2 平成3~4年度高部字山平遺跡の調査

## 挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図(1/25,000)	8	第13図 1号屋外埋甕(1/20)	23
第2図 調査区位図(1/1,500)	9	第14図 1号溝(1/60)	25
第3図 第1~19トレンチ全体図(1/300)	11~12	第15図 3~5号溝平面図(1/80)	26
第4図 第20~30トレンチ全体図(1/300)	13~14	第16図 3~5号溝土層図(1/80)	27
第5図 第31~39トレンチ全体図(1/300)	15~16	第17図 2・6・7号溝(1/60)	29
第6図 第1~6トレンチ土層図(1/100)	17	第18図 11号溝(1/80)	30
第7図 第7~19トレンチ土層図(1/100)	18	第19図 13号溝(1/80)	31
第8図 第20~33トレンチ上層図(1/100)	19	第20図 12号溝(1/60)	32
第9図 第34~39トレンチ土層図(1/100)	20	第21図 14号溝(1/60)	32
第10図 1号居住址(1/40)	22	第22図 2号居住址(1/60)	32
第11図 第24トレンチ(1/40)	22	第23図 3号居住址(1/40)	35
第12図 3号土坑(1/40)	23	第24図 性格不明遺構(1/40)	35

第25図	1～3号小穴(1/40) .....	36	第31図	縄文土器(6)(1/3) .....	42
第26図	縄文土器(1)(1/3) .....	37	第32図	凹石(1/3) .....	43
第27図	縄文土器(2)(1/3) .....	38	第33図	第4トレンチ出土遺物(1/4) .....	44
第28図	縄文土器(3)(1/3) .....	39	第34図	第2～8・29トレンチ出土遺物(1/3) .....	45
第29図	縄文土器(4)(1/3) .....	40			
第30図	縄文土器(5)(1/3) .....	41	第35図	第30～32トレンチ出土遺物(1/3) .....	46

## 表 目 次

第1表	出土遺物観察表(1) .....	46
第1表	出土遺物観察表(2) .....	47
第1表	出土遺物観察表(3) .....	48
第1表	出土遺物観察表(4) .....	49
第1表	出土遺物観察表(5) .....	50
第1表	出土遺物観察表(6) .....	51

## 写真図版目次

図版 1	高部宇山平遺跡遠景（東から）	調査前風景（第1～6トレンチ付近）		
	作業風景	伊勢塚古墳（東から）		
	2号溝東壁土層	2号溝		
図版 2	2号溝土器出土状況	3号溝土器出土状況	3・5号溝	4・5号溝
	5号溝（第5トレンチ）	7号溝		
図版 3	1号住居址土器出土状況	1号屋外埋甕	第21トレンチ	2号土坑
	3号土坑	2号住居址		
図版 4	3号住居址北壁土層	11号溝	12号溝	13号溝（第37トレンチ）
	13号溝（第38トレンチ）	13号溝北壁土層	（第37トレンチ）	
図版 5	1号土坑出土土器	2号土坑出土土器	1号屋外埋甕	縄文土器(1)
	縄文土器(2)	縄文土器(3)		
図版 6	縄文土器(4)	縄文土器(5)	縄文土器(6)	縄文土器(7)
	縄文土器(8)	凹石(1)	凹石(2)	
図版 7	弥生土器	2号住居址出土土器	2号溝出土土器	3号溝出土土器(1)
	3号溝出土土器(2)	3号溝出土土器(3)	11号溝出土土器	

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯

山梨県東八代郡豊富村高部字宇山平他に所在する高部字山平遺跡及びその周辺は、縄文時代から古墳時代にかけての遺物が表面採集できる。現在、地名は畑であり、その多くは、養蚕のための桑及び果樹である。桑畑の中には荒地化し、果樹その他の普通畑に変更する例も少なくないのが現状である。

そのような状況下で豊富村では、昭和56年度からの10年間を対象とした「豊富村総合計画」(第1次)を策定してきたが、その間にリニア推進、若年世代の村外流出など村をとりまく社会・経済環境は、大きく変化した。そこで豊富村では、「パストラル・シティ(田園都市)豊富」を目指した「豊富村第2次総合計画」が平成3年度に策定された。その中で、平成12年度までに本村の人口を現在の3,500人から5,500人に増加することを計画しており、それに対応するための住宅用地の確保につとめることを推進している。その用地予定地に高部区と大鳥居区にまたがる宇山平が選定されたのだが、同地は、高部字山平遺跡をはじめ、埋蔵文化財包蔵地が分布していることなどから、平成2年度より、その取り扱いについて県文化課の指導により、今後の開発計画に対処するために資料収集も含め発掘調査を実施しており、平成4年度には、国・県からの補助金を受け、村教育委員会が主体となって調査を行うことになった。発掘調査面積は、約496m<sup>2</sup>である。

平成4年9月22日付け、豊教発第287号で文化財保護法第98条の2第1項の規定による、埋蔵文化財発掘調査の通知書を文化庁長官(県教委経由)に提出する。

発掘調査は、平成4年10月6日から開始し、12月17日に現地調査を終了した。その後、報告書作成までの整理作業を完了したのは、平成5年3月20日であった。

平成4年12月22日付け、豊教発第391号で遺失物法第13条の規定による、埋蔵物発見届を南甲府警察署長に提出した。

## 第II章 遺跡の位置と環境

高部字山平遺跡は、山梨県東八代郡豊富村高部字山平他に所在し、甲府盆地の南側から東側に連なる曾根丘陵を形成する字山平と呼ばれる台地上の北側に立地する。

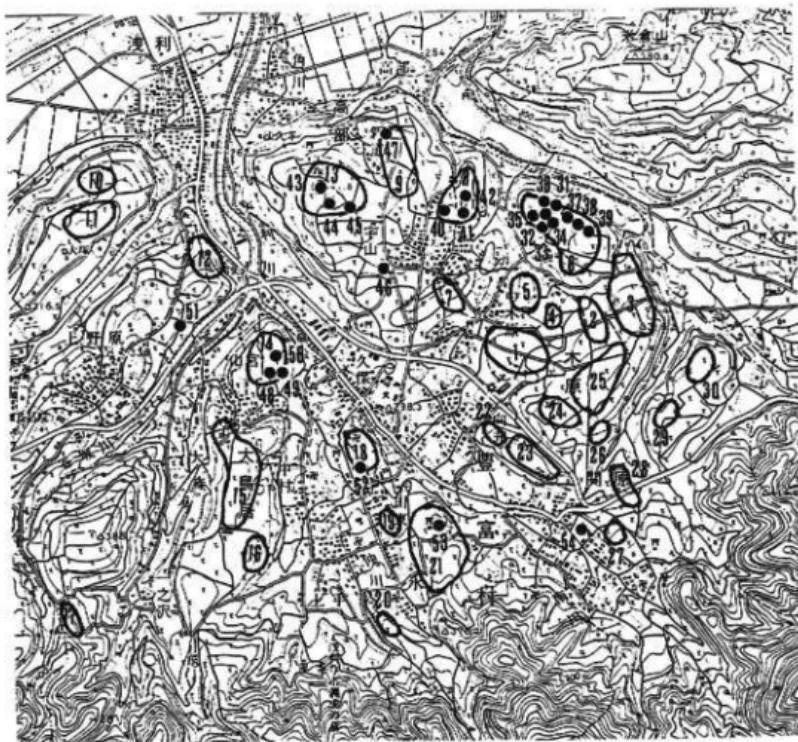
曾根丘陵は、山梨県の中央部に広がる甲府盆地の南縁、富士北麓と甲府盆地を分断する御坂山地の北方に広がり、長さ約13km、幅2～3km、盆地との比高50～150mの丘陵である。字山平は、曾根丘陵の西側に位置し、北側に笛吹川が流れ、また東西を七覚川、浅利川に挟まれた台地である。標高は、台地上の西端に王塚古墳が立地するが、その墳丘上に341.8mの三角点が設置されている。

高部字山平遺跡の周辺地域には、54か所の遺跡が存在し、その大半が台地上に立地する。その初源として、横畠遺跡<sup>41)</sup>・関原赤治郎遺跡<sup>42)</sup>から先土器時代のナイフ形石器が出土している。また、高部字山平遺跡の七覚川を挟んで東に対峙する米倉山においても先土器時代のナイフ形石器が数点出土している。

それに続く縄文時代になると、周辺の台地上の26か所で点在するようになる。(1～4、6～11、13～21、23～26、28～30) また、弥生時代は、13か所に分布する。(3、6～11、13～15、19、20、23)

古墳時代は、散布地が17か所で、古墳が24基あるが、その多くは、墳丘が削平されて消滅したものが多く、また、未確認のも含めて本米は、21基以上築造されたであろう。(1、3、6、8、9、11、13～16、18、20、22～25、29、31～54) その分布として、6世紀前半とされる帆立貝式古墳の三星院古墳を中心とする三星院古墳群、宇山平古墳群、城原古墳群、田見堂及島居原古墳群の4群に大別できる。特に、宇山平古墳群中の王塚古墳は、全長61.2mの帆立貝式古墳で、内部施設が合掌式石室と特異な形態を有する。また、田見堂及島居原古墳群内には、三珠町に属する台地上に赤鳥元年銘鏡が出土した島居原孤塚古墳、また、その西側には、円筒埴輪をもつ大塚古墳などの古墳が点在する。

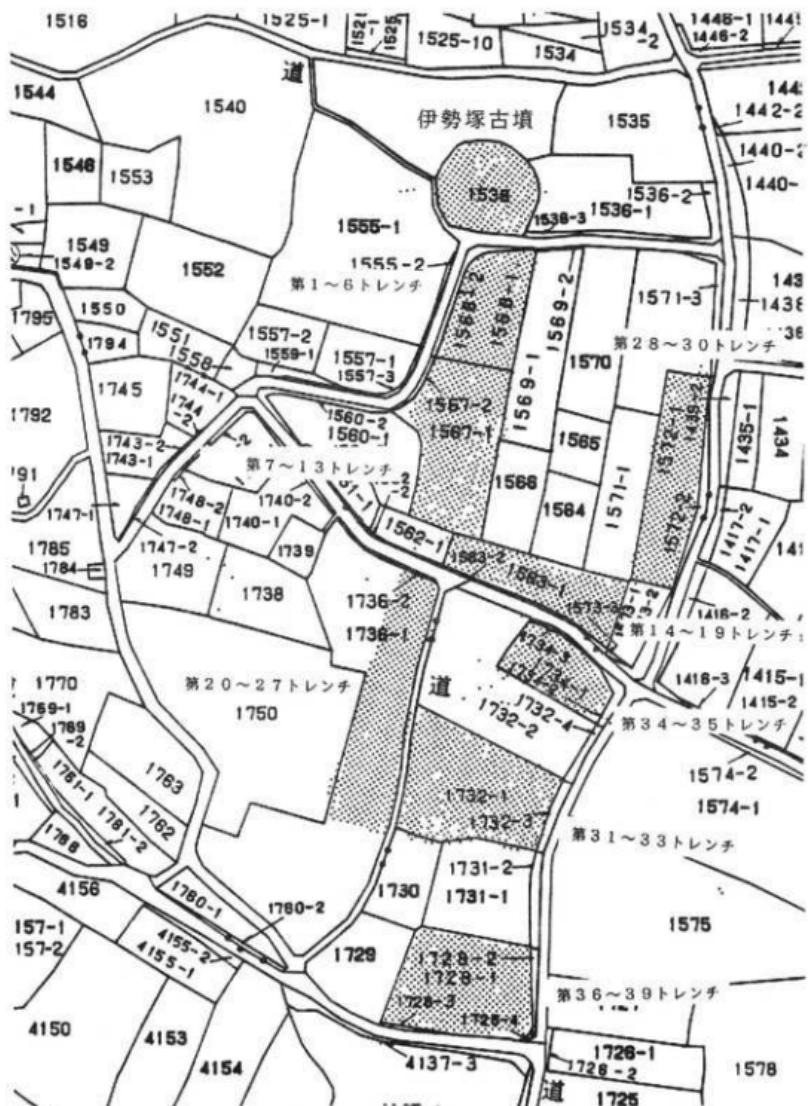
奈良・平安時代の散布地は、10か所ある。(2、7、8、10、11、13、18、19、21、25、26) 中世以降は、6か所で、その中で館跡としては、壇の浦の合戦で活躍した甲斐源氏の浅利与一館跡、また、武田家家臣の三枝土佐守虎吉館跡がある。(いずれも『甲斐国志』の記述に基づく)(2～5、12、27)



- |              |              |            |
|--------------|--------------|------------|
| 1. 駒平遺跡      | 2. 上三口西遺跡    | 3. 上三口遺跡   |
| 4. 高内遺跡      | 5. 三枝土佐守館跡   | 6. 上野原遺跡   |
| 7. 代中遺跡      | 8. 中原遺跡      | 9. 高部宇山平遺跡 |
| 10. 宮の下遺跡    | 11. 斎野原遺跡    | 12. 洋利氏館跡  |
| 13. 大鳥居宇山平遺跡 | 14. 城原遺跡     | 15. 見面遺跡   |
| 16. 倉田遺跡     | 17. 西沢遺跡     | 18. 久保遺跡   |
| 19. 川東遺跡     | 20. 久保田遺跡    | 21. 桐畠遺跡   |
| 22. 木原赤二所遺跡  | 23. 間取羽谷台部遺跡 | 24. 原遺跡    |
| 25. 東原遺跡     | 26. 中原遺跡     | 27. 柿戸原遺跡  |
| 28. 浜井塙遺跡    | 29. 付山麻遺跡    | 30. 付山北遺跡  |
| 31~39 無名墳    | 40~42 無名墳    | 43. 王塚古墳   |
| 44~46 無名墳    | 47. 伊勢塚古墳    | 48. 城原大塚古墳 |
| 49~50 無名墳    | 51. 金等古墳     | 52. 無名墳    |
| 53. お御崎さん古墳  | 54. おさんこうじ古墳 |            |



第1図 周辺遺跡分布図(1/25,000)



第2図 調査区位置図(1/1,500)

### 第III章 調査の経過と成果

発掘調査は、平成4年10月6日から12月17日まで行った。調査方法は、調査対象地に応じて任意に幅1～2m、長さは、3～20mの発掘地（トレンチ）を39か所設定して、埋蔵文化財有無の確認を行った。表十・はぎは、重機によりローム面まで掘削し、ローム面を遺構確認面とした。遺構確認精査及び遺構の覆土掘削は、人力により行った。

基本的に、今回は、遺跡の範囲の把握につとめることに重点を置いたため、トレンチの拡張を行わなかったが、第24トレンチの西南隅において屋外埋甕が出土し、その全面の検出を行うために西側南半分を50cmほど拡張した。

本遺跡の基本層序は、次に示すとおりとする。

第I層 褐色土層（耕作土）

第II層 暗褐色土層

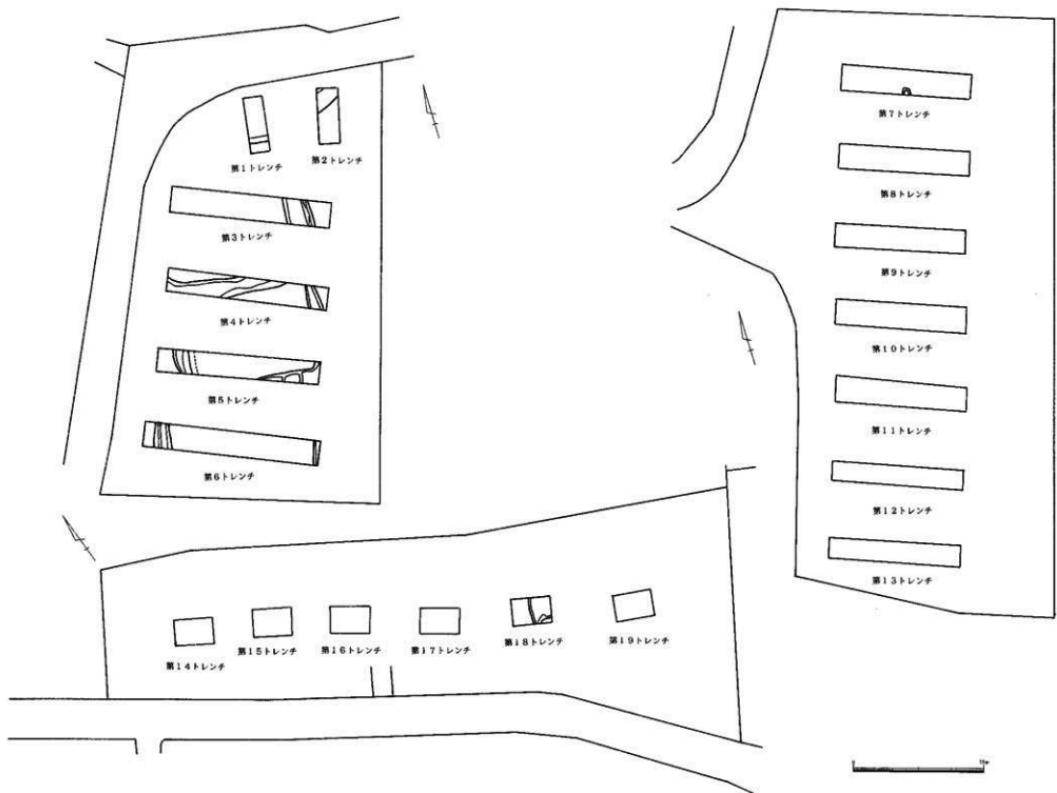
第III層 黒褐色土層

第IV層 黄褐色ローム層

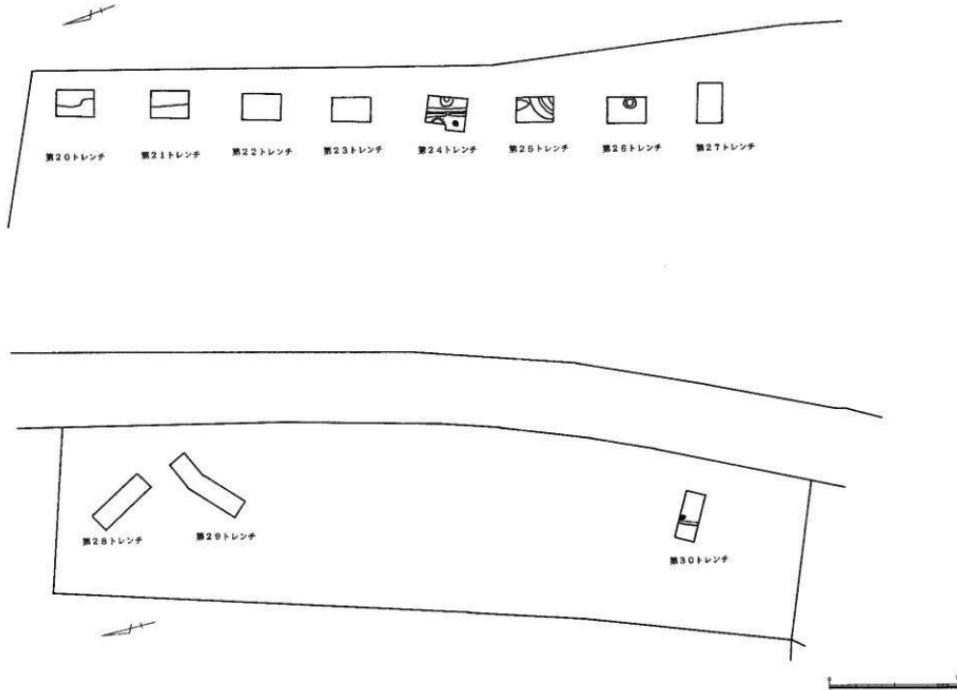
第V層 黄白色粘質土層（下部は疊を含む）

ただし、この層序は、本遺跡全体に共通するものではない。第I層は、耕作土であり、各トレンチに共通して見られる。ただ、第7～27トレンチでは、20cm前後と比較的薄いが、第1～6トレンチおよび第28～39トレンチでは、30～70cmと幅はあるが、やや厚くなる。第II層は、第30・34・35および37～39トレンチに見られ、遺跡の南側に堆積する。第III層は、第1～8トレンチにあり、10～50cmと堆積している。第II・III層は、以上のように地点により堆積の有無が異なり、また、存在せずに第I層の直下にローム層の第IV層となるトレンチが数多く見られた。第IV層の黄褐色土（ローム層）は、大部分で見られたが、その下層の黄白色粘質土が第13・14・20トレンチで露出していた。

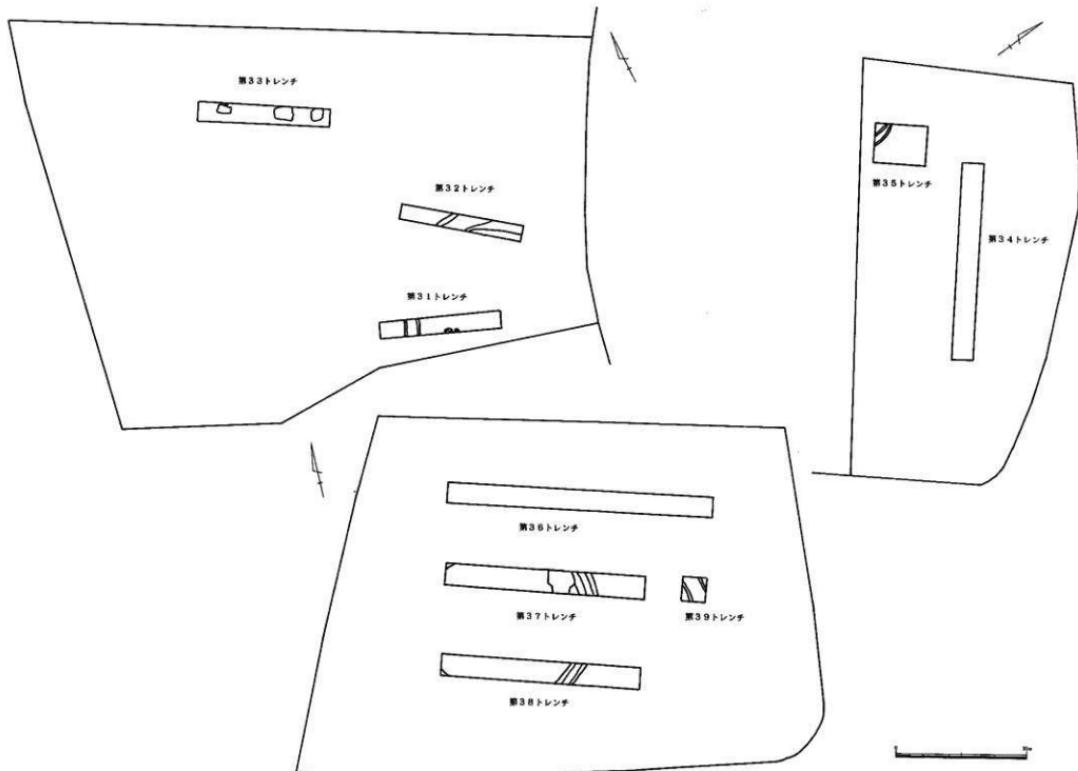
調査の結果、縄文時代後期前葉の土坑が3基、同時期の住居址1軒、同時期の屋外埋甕が1基、古墳時代前期の方形周溝墓1基以上、古墳の周溝3条、溝2条、古墳時代中期の住居址1軒、近・現代の竪跡3条、時期不明の住居址1軒、小穴3基、性格不明遺構1基が検出され、縄文時代から古墳時代にかけての土器が多数出土した。



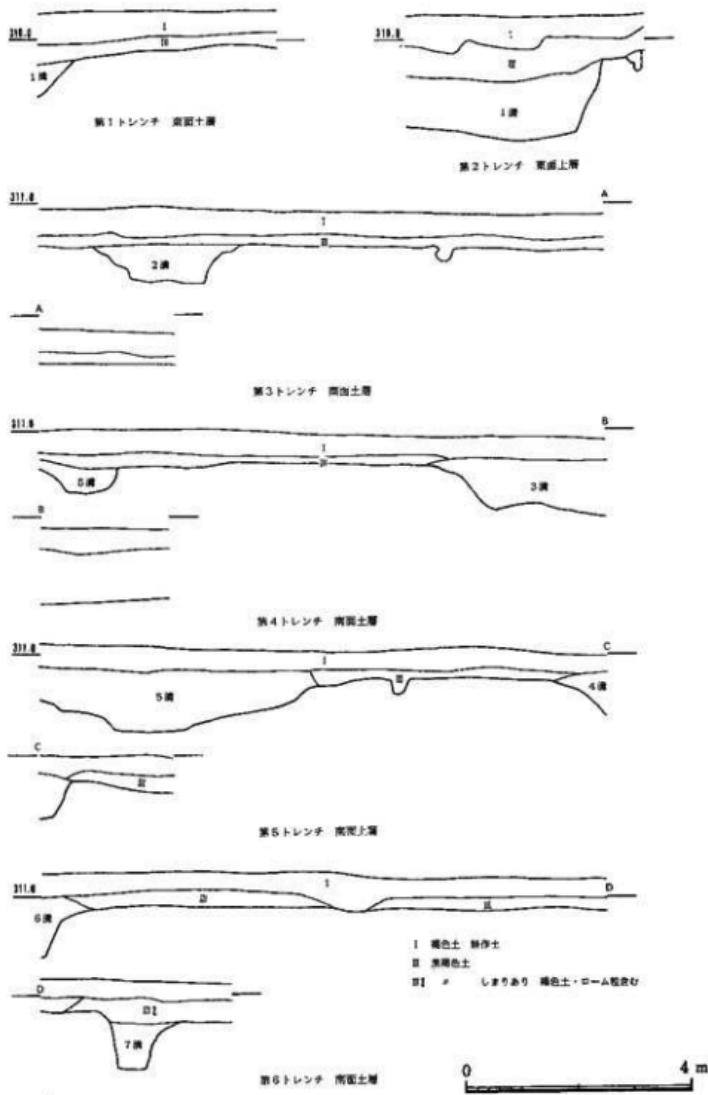
第3図 第1~19トレンチ全体図(1/300)



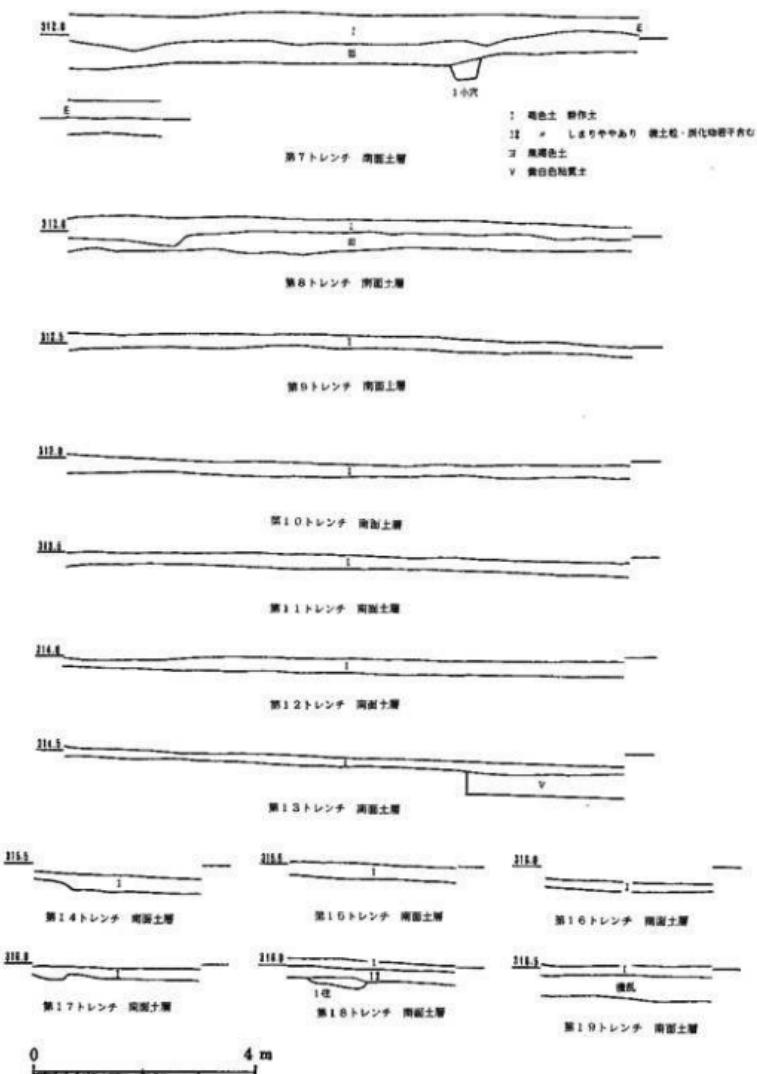
第4図 第20~30トレンチ全体図(1/300)



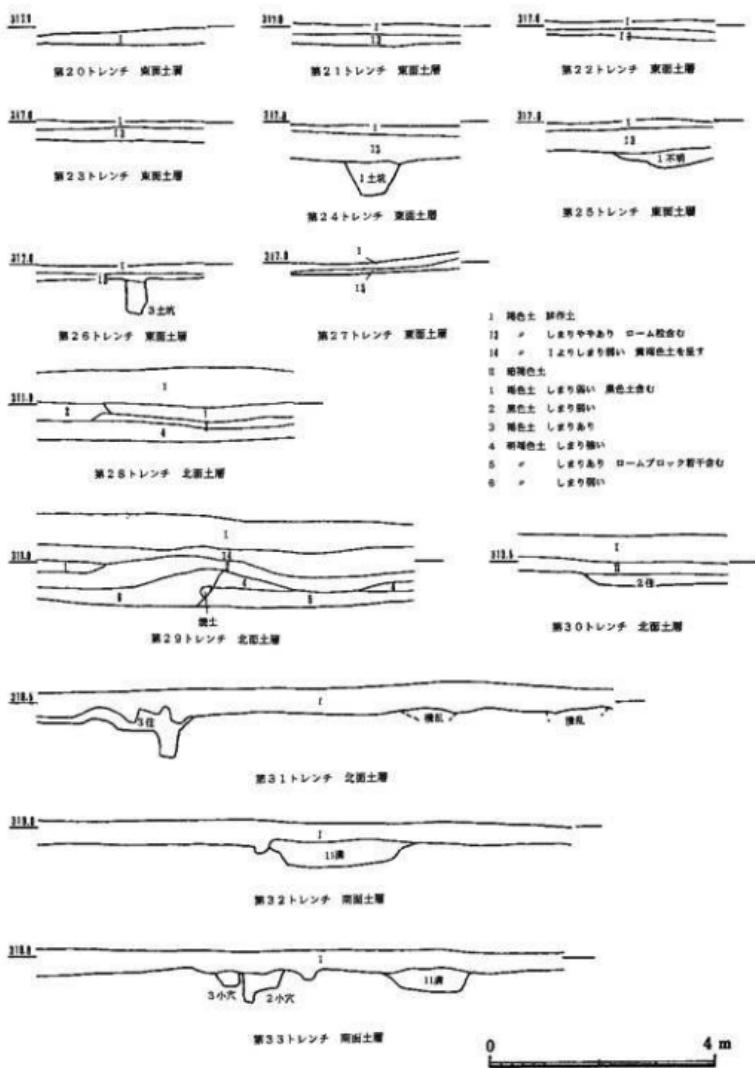
第5図 第31~39トレンチ全体図(1/300)



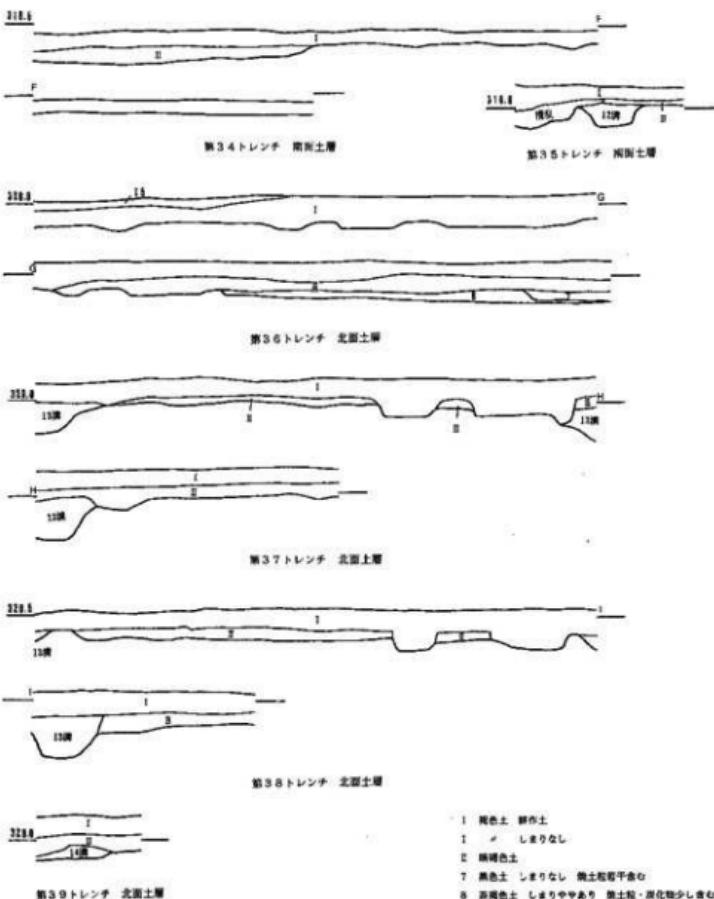
第6図 第1～6トレンチ土層図(1/100)



第7図 第7~19トレンチ土層図(1/100)



第8図 第20~33トレンチ土層図(1/100)



第9図 第34~39トレンチ土層図(1/100)

## 第Ⅳ章 遺構と遺物

### 第1節 繩文時代の遺構と遺物

#### 1号住居址（第10・26図）

第18トレンチの東半分を占め、平面プランは、ほぼ方形を呈し、南西隅が突出するような状態で確認された。東西幅160cm以上、南北幅170cm以上、深さは20cmである。立ち上がりは緩やかで、底面は平坦である。柱穴など付属施設を検出することができなかったが、遺構の規模、床面の平坦さなどを考えて住居址とした。

出土遺物は、繩文時代後期を中心とした土器が多数出土した。

#### 1号上坑（第11・26・27図）

第24トレンチ東側にあり、平面プランは、円形を呈する。南北幅100cm、東西幅65cm以上、深さは65cmに達する。立ち上がりは比較的急で、底面は平坦である。覆土は暗褐色の單一層である。

出土遺物は、繩文時代後期の上器が多数出土した。

#### 2号土坑（第11・27図）

第24号トレンチの西側にあり、平面プランは円形を呈する。南北幅90cm、東西幅35cm以上、深さは65cmである。壁面は、上部がほぼ垂直に下がり、下部にいくほど上面プランより広がる。このことから、本遺構は、いわゆる袋状土坑と認められる。底面は平坦で、覆土は暗褐色土であり、ローム粒の混入量で細分できる。

出土遺物は、繩文時代後期の土器が多数出土した。

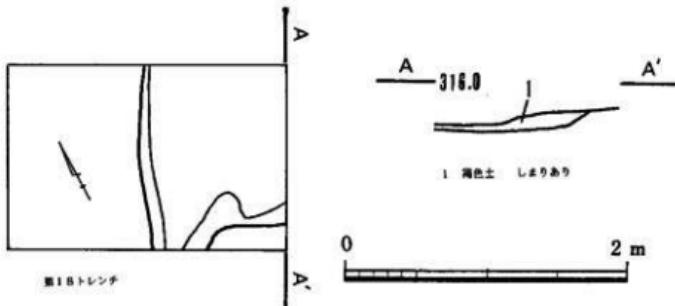
#### 3号土坑（第12・32図）

第26トレンチの東側にあり、円形プランを呈する。南北幅90cm、深さ110cmを測る。急な立ち上がりを呈し、底面は平坦である。覆土は褐色土である。

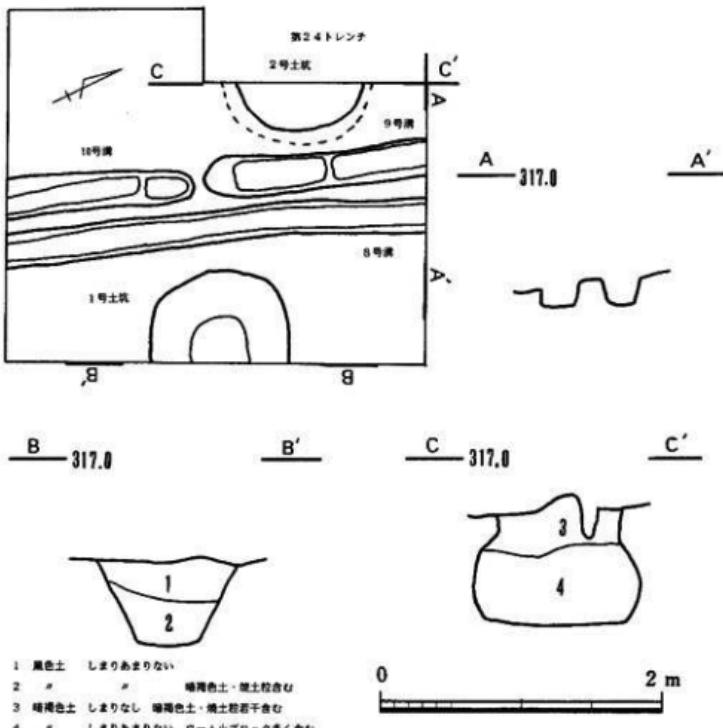
出土遺物は、繩文時代後期の土器の他、門石が出土した。

#### 1号屋外埋甕（第13・27図）

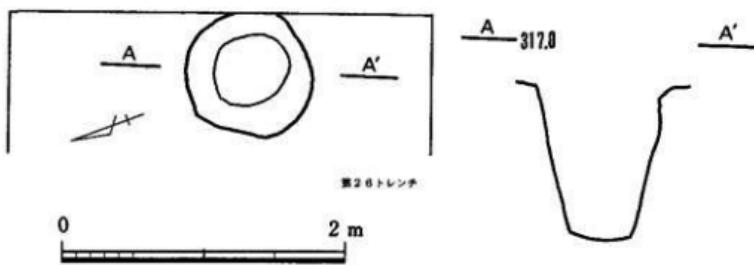
第24トレンチの西側で検出された屋外埋甕で、調査区を西側に50cmほど拡張して土器の全周の検出を行った。掘り込みプランは確認できず、住居址などの遺構に伴うものではないと思われる。口縁部を地面に向けて伏せ、反位の状態で置かれていたが、胴部から底部にかけては、消失していた。口縁部の内側には、長さ30cm、幅15cm、厚さ5cmの平石を据えていた。土器本



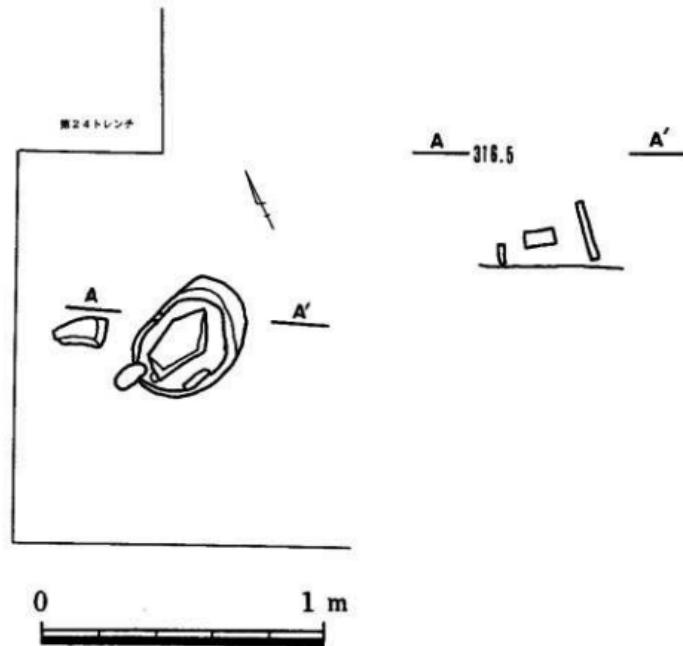
第10図 1号住居址



第11図 第24トレンチ(1/40)



第12図 3号土坑(1/40)



第13図 1号屋外埋蔵

体は、縄文時代後期前葉の堀之内式の粗製深鉢で、外面は無文であった。

## 第2節 弥生時代の遺物（第34図）

弥生時代の遺構は検出されず、刻目口縁の壺形土器の口縁部が4点、櫛描波状文を施す壺形土器の口縁部が1点出土している。

## 第3節 古墳時代の遺構と遺物

### 2号住居址（第22・35図）

第30トレンチの東半部を占め、平面プランは、大部分が調査区外のため不明である。東西幅255cm以上で、深さは20cmを測る。比較的緩やかな立ち上がりを呈し、底面はほぼ平坦で、覆土は暗褐色土である。西壁際に長軸43cm、短軸25cm、深さ15cmを測る椭円形を呈する小穴が1基検出された。

出土遺物は、古墳時代中期の土師器の高杯坏部、同脚部、須恵器の壺の破片が出土した。

### 1号溝（第14・34図）

第1・2トレンチで確認され、流れの方向や覆土の類似から同一遺構と認めた。調査区に近接して伊勢塚古墳と呼称される古墳が立地している。現在、東西29m、南北27m、高さ3mの円墳であるが、1号溝の平面プランがこの伊勢塚古墳を廻っており、本遺構は、伊勢塚古墳の周溝と思われる。第2トレンチの東壁土層の観察によると、幅350cm以上、深さ145cmで、急な立ち上がりを呈し、底面は比較的平坦である。覆土はレンズ状堆積を呈し、第1トレンチとも合わせ11層に分層できた。平面プランを基に径を推定してみると約33mとなる。

出土遺物は、古墳時代前期と思われる壺や甕の破片の他、縄文土器が多数混入していた。

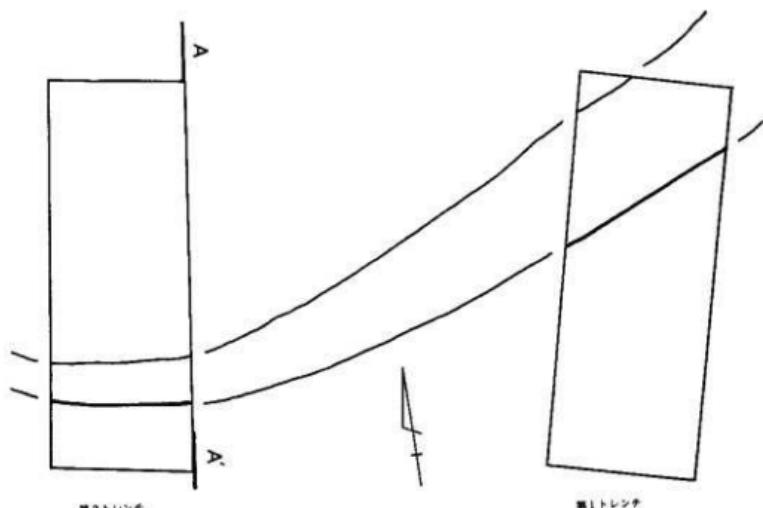
### 2号溝（第17・34図）

第3トレンチ東側にあり、東西に走る溝で、方形周溝墓の1部である。

今回は、全面発掘でなくトレンチという限られた範囲の中での調査であり、2～7号溝は、方形周溝墓と推定されるものの確実に方形周溝墓と確認できるのは、3～5号の溝の1基だけであるため、今回は、あえて溝を個別に報告することにした。

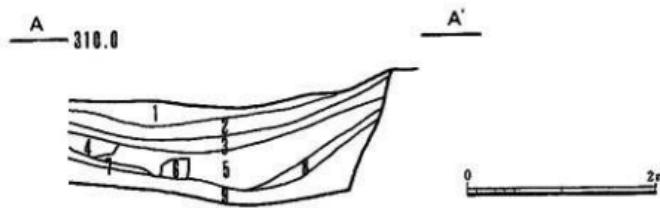
東西幅255cm、深さ70cmを測る。以下に述べる3～7号溝もそうであるが、壁の傾きが方台部の内側よりも外側の方が傾斜が急という傾向にある。覆土は暗褐色土と灰褐色土の2層で、暗褐色土は、さらに明るさから2層に細分できる。

出土遺物は、古墳時代前期の土師器の壺が出土した。



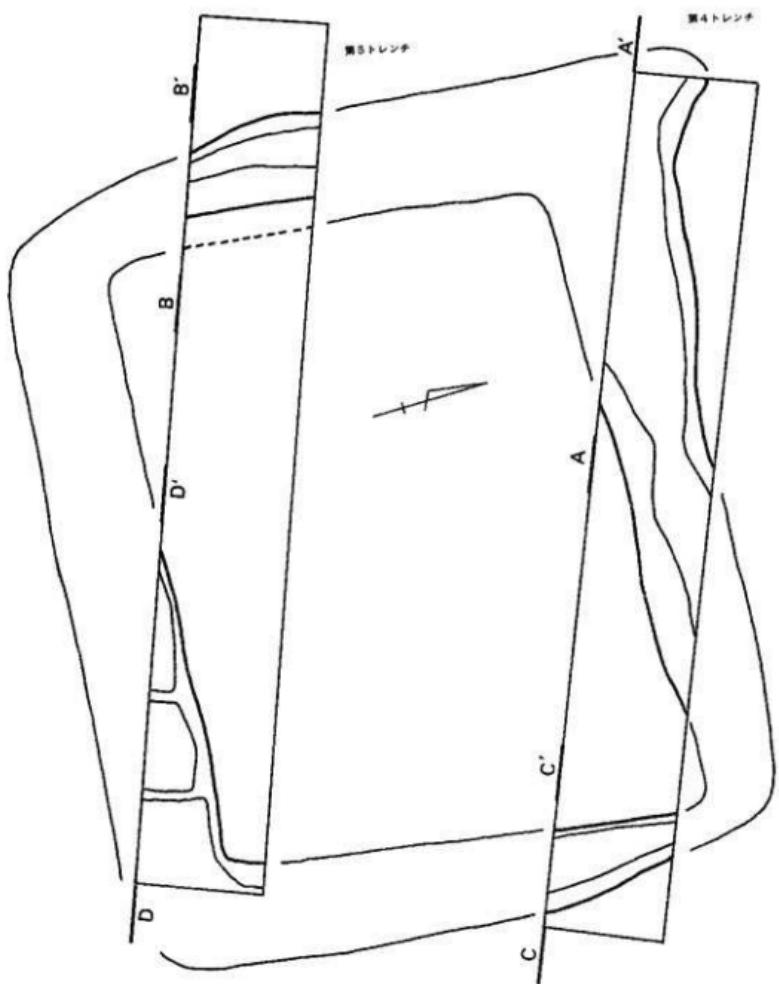
第2トレント

第1トレント

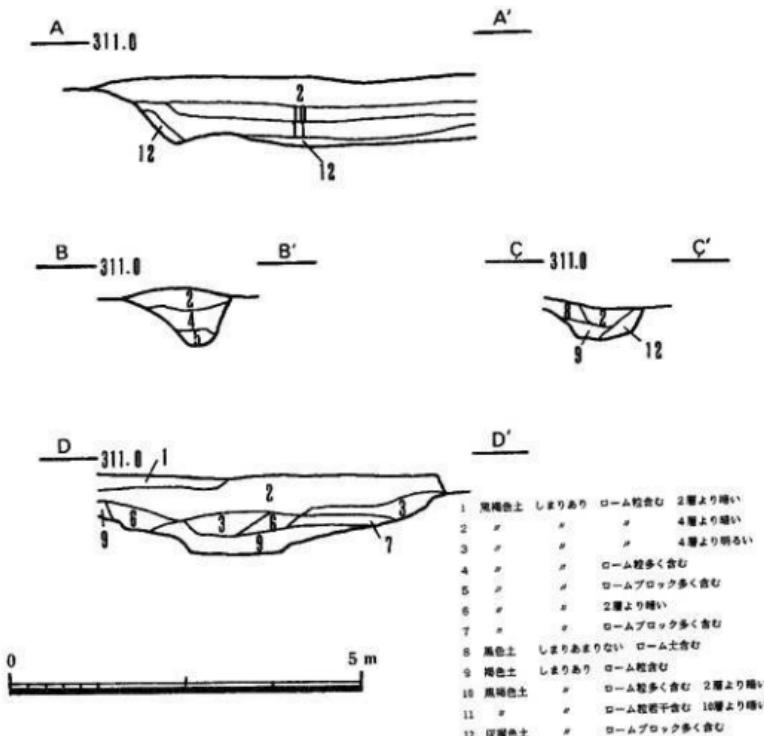


- |   |      |          |                  |
|---|------|----------|------------------|
| 1 | 褐色色土 | しまりややあり  | 黒色土多く含む          |
| 2 | 〃    | 〃        | ローム粒少し含む 1層より明るい |
| 3 | 〃    | 〃        | 黒色土多く含む          |
| 4 | 褐色土  | しまりややあり  | ローム土多く含む         |
| 5 | 褐色色土 | しまりあまりない |                  |
| 6 | 石    |          |                  |
| 7 | 灰褐色土 | しまりややあり  | ローム粒多く含む         |
| 8 | 褐色色土 | しまりなし    | ローム土多く含む         |
| 9 | 〃    | しまりあまりない | 黒色土・ローム土含む       |

第14図 1号溝(1/60)



第15図 3~5号溝平面図(1/80)



第16図 3～5号溝土層図(1/80)

#### 3号溝（第15・16・33・34図）

第4トレンチにある東西を走る溝で、以下、4・5号溝と合わせて、1基の方形周溝墓を形成する溝である。南北幅130cm、深さ60～90cmあり、覆土は黒褐色土と灰褐色土の2層で、黒褐色土は、3層に細分できる。そして、この方形周溝墓は、東西幅12m、南北幅9.4mの規模と推定できる。

出土遺物は、古墳時代前期の土師器の壺、高壺、小形器台などの他、繩文土器も多数混入していた。

#### 4号溝（第15・16図）

第5トレンチの西側に位置し、南北方向に走る。東西幅は155cm、深さは65cmを測る。底面

は、ほぼ平坦で30cmの幅であり、上幅に比べると極端に狭くなる。覆土は黒褐色土で、ロームの混入状態で3層に細分される。

出土遺物は、縄文土器や凹石〔図版6(1)〕が混入していた。

#### 5号溝（第15・16・34図）

第4トレンチでは、南北に走り、第5トレンチ内で西方向に屈曲する。東側及び南側の立ち上がりは、調査区外のため詳細不明であり、幅の数値も不明である。深さは45cmを測る。第5トレンチ内の東西方向に走る溝の底面に東西幅155cm、南北幅85cm以上の落ち込みがあり、溝内埋葬の可能性がある。覆土は、黒褐色土、黒色土、褐色土、灰褐色土の4層であり、そのうち黒褐色土が4層に細分できる。

出土遺物は、S字甕の口縁部や胴部の破片が出土している。

#### 6号溝（第17図）

第6トレンチの東端に南北方向に走り、東側の立ち上がりは、調査区外のため詳細不明である。深さは65cmを測る。覆土は黒褐色土で、2層に細分できる。

出土遺物は、縄文土器片が混入していた。

#### 7号溝（第17・34図）

第6トレンチの西側で、南北方向に走っている。東西幅125cm、深さは85cmを測る。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直で、断面は箱形を呈する。覆土は黒褐色土で、2層に細分できる。

出土遺物は、S字甕の口縁部などがある。

#### 11号溝（第18・35図）

第32・33トレンチで確認された溝で、第32トレンチでは、ほぼ東西方向に走り、調査区中央で南北方向に湾曲するように流れを変え、第33トレンチでその延長が検出された。

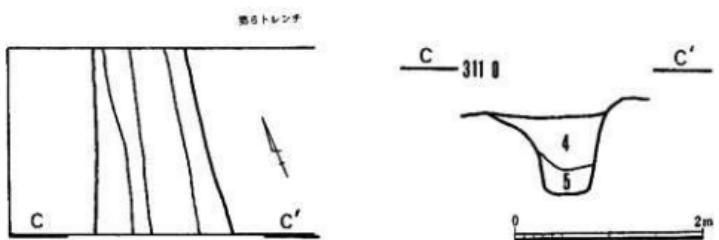
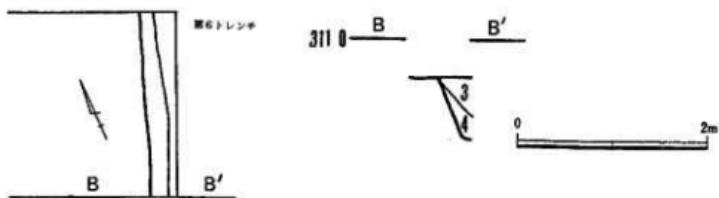
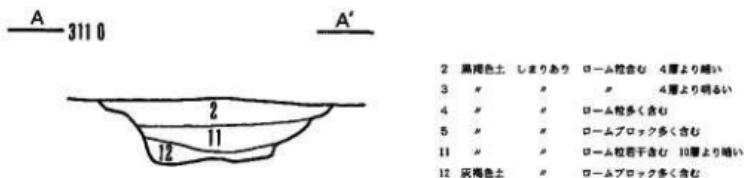
第32トレンチでは、南北幅200cm、深さ40cm、第33トレンチでは、東西幅が110cmと狭くなり、深さ35cmである。比較的急な立ち上がりで、底面は、ほぼ平坦である。覆土は黒褐色土と暗灰色土の2層である。

溝の走る方向が円形を描いている様相から、古墳の周溝と考えられる。そして、その直解は、推定約15mほどとなる。

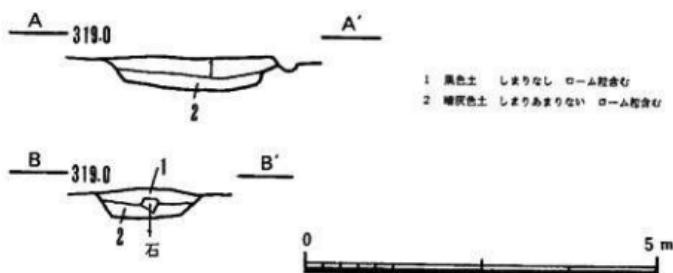
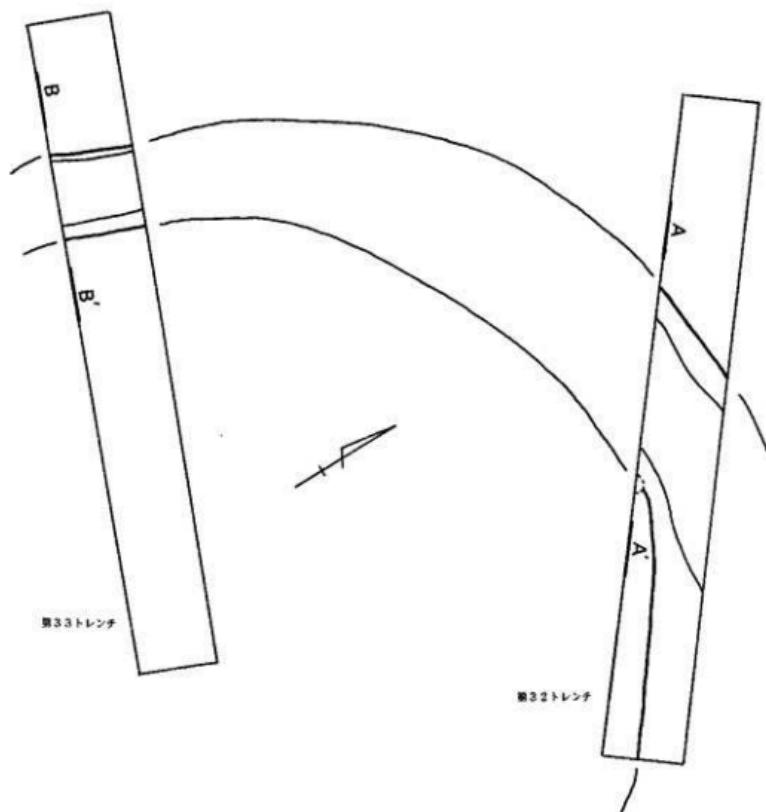
出土遺物は、S字甕の口縁部、領(?)の他、縄文土器が多数出土した。

#### 12号溝（第20図）

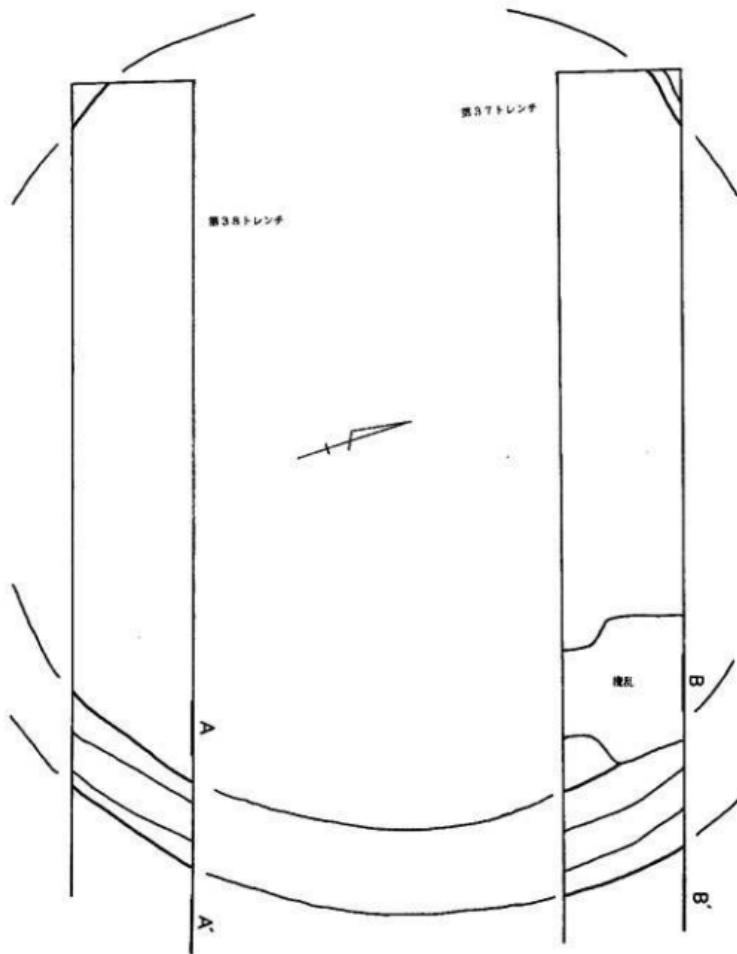
第35トレンチの南西部にあり、調査区内で湾曲し、南及び西方向に伸びている。東西幅120cm、深さ40cmを測る。断面は上場付近でラッパ状に広がり、底面は平坦である。覆土は黑色土と暗褐色土の2層である。



第17図 2・6・7号溝(1/60)

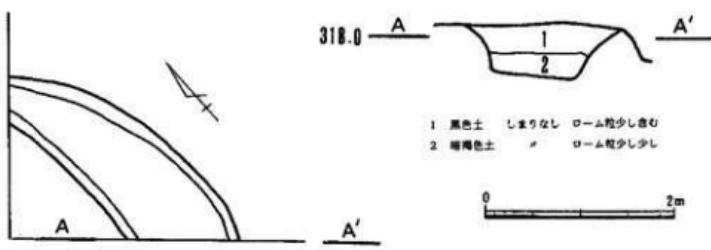


第18図 11号溝(1/80)



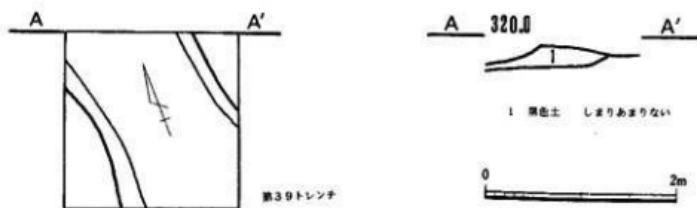
- 1 黒色土 しまりあまりない  
 2 × × 増殖色土、壤土粒含む  
 3 増殖色土 しまりなし 増殖色土、壤土粒石不含む  
 4 × しまりあまりない ローム小ブロック多く含む

第19図 13号溝(1/80)

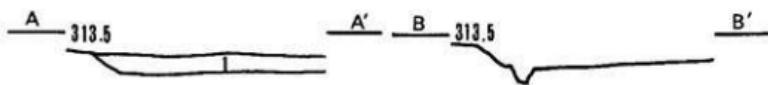
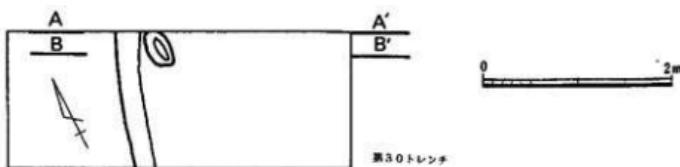


第35トレンチ

第20図 12号溝(1/60)



第21図 14号溝(1/60)



1 増褐色土 しまりあり

第22図 2号住居址(1/60)

出土遺物は、縄文土器片が混入していた。

#### 13号溝（第19図）

第37・38トレンチの中央やや東より、第37トレンチの調査区西北隅及び第38トレンチの南西隅に上場の一部が確認できる。流れの方向が円形に廻っていることから古墳（小円墳）の周溝と思われる。その直径は、約14.4mと推定でき、溝幅は105~145cm、深さ60~80cmを測る。第37トレンチで遺構の西壁は、緩やかに立ち上がっていいくものの、おおむね急な立ち上がりを呈し、底面はレンズ状を呈する。覆土は黒色土と暗褐色土で、それぞれ2層ずつに細分できる。

出土遺物は、古墳時代の遺物は出土せず、縄文時代後期を中心とする土器が多数出土した。

#### 14号溝（第21図）

第39トレンチ内を南北方向に走る溝で、東西幅150cm、深さは17cmを測る。比較的緩やかな立ち上がりを呈し、底面は平坦である。覆土は暗褐色土である。

出土遺物は、縄文時代後期を中心とする土器が混入していた。

### 第4節 その他の遺構

#### 3号住居址（第23図）

第31トレンチの西側にある。重機により表土はぎをしたところ、焼土が検出され、北面壁で上層観察をしたところ、大幅に削平してしまったのが確認できた。したがって、平面プランは、詳細不明である。北壁土層の観察によると、東西幅280cm以上、深さ10cm程を測り、比較的緩やかな立ち上がりを呈し、底面は、調査区西壁より約1m東のところで10cm程度立ち上がる。住居址東壁際に幅が40cm、深さ50cmを測る小穴が1基検出された。覆土は6層に分層でき、小穴の西側の立ち上がり際に東西幅85cm、深さ20cmの地床が検出された。

出土遺物はなく、時期不明である。

#### 8号溝（第11図）

第24トレンチの中央を南北に走り、幅25cm、深さ15cm、覆土は褐色土である。以下に述べる9・10号溝同様、近現代の畝跡であろう。

#### 9号溝（第11図）

第24トレンチの中央を南北方向に、8号溝の西側で平行に走り、調査区中心部で切れる。幅25cm、深さ10cmを測る。

#### 10号溝（第11図）

第24トレンチの中央を南北方向に、8号溝の西側で平行に走り、調査区中心部より始まり、南側は調査区外に延びる。幅25cm、深さ20cmを測る。

#### 性格不明遺構（第24図）

第25トレンチ南東部にあり、大部分が調査区外であり、平面プランは不明であるが、調査区内で見る限りでは、湾曲を呈し、南と東方向に伸びる。底幅は40~50cmと狭く、溝状遺構にも見えるが判断しかねるので、今回は性格不明遺構とする。

南北幅は180cm以上で、深さは25cmを測る。緩やかに立ち上がり、底面はやや南側に上がり、覆土は褐色土である。

出土遺物は、縄文時代後期の土器が出土しているが、時期は不明である。

#### 1号小穴（第25図）

第7トレンチの中央南側にあり、平面プランは方形を呈する。東西幅55cm、南北幅55cm以上で、深さは35cmを測る。急な立ち上がりを呈し、底面は平坦で、覆土は黒褐色土である。

出土遺物は、縄文土器片が1点出土しているが、時期は不明である。

#### 2号小穴（第25図）

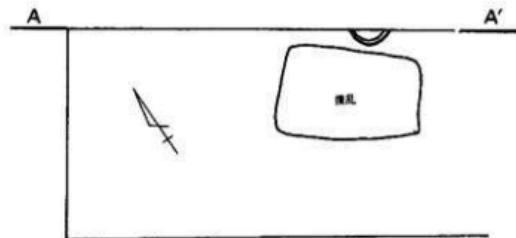
第33トレンチの調査区中央の南側にあり、その東側に3号小穴が臨接する。東西幅75cm、南北幅30cm以上で、西側に中段をもち、確認面より中段までが35cm、下段の最深部までが60cmを測る。急な立ち上がりを呈し、覆土は暗褐色土で、3層に細分できる。

出土遺物はなく、時期不明である。

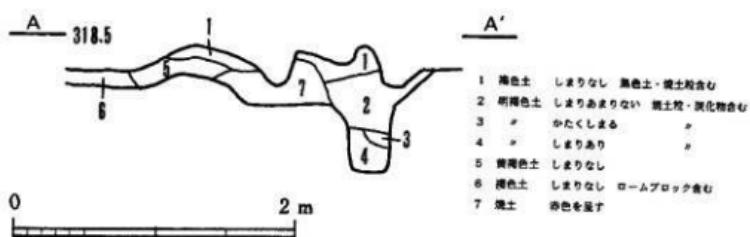
#### 3号小穴（第25図）

第33トレンチの調査区中央の南側にあり、南半分は調査区外に伸びる。東西幅45cm、深さ25cmを測る。急な立ち上がりを呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は暗褐色土である。

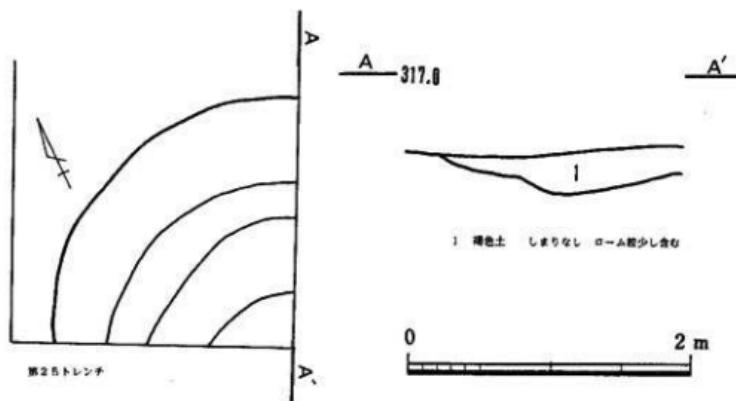
出土遺物はなく、時期不明である。



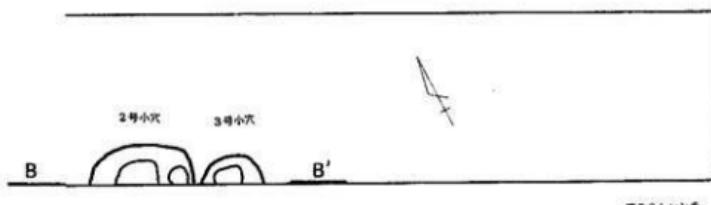
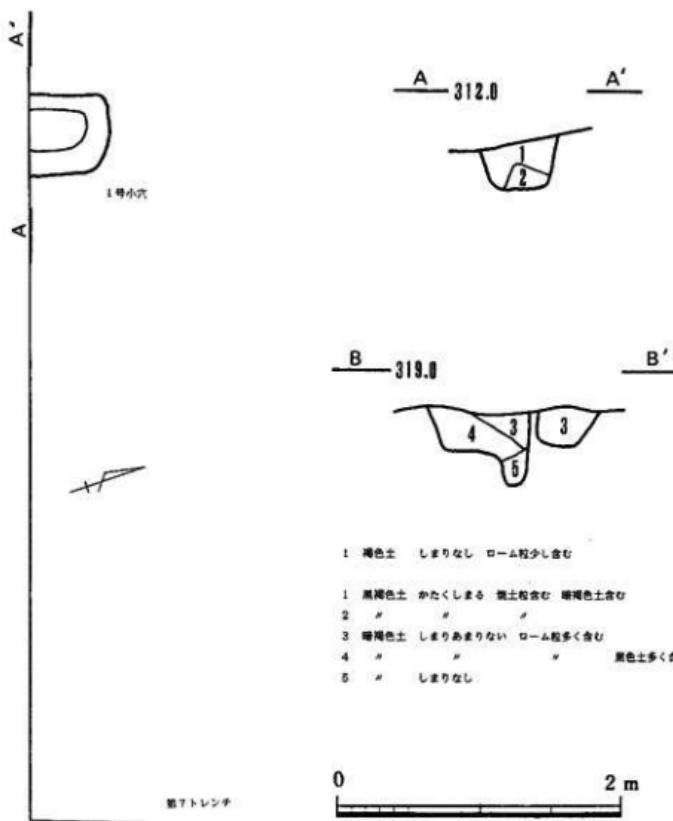
第21図 トレンチ



第23図 3号住居址(1/40)

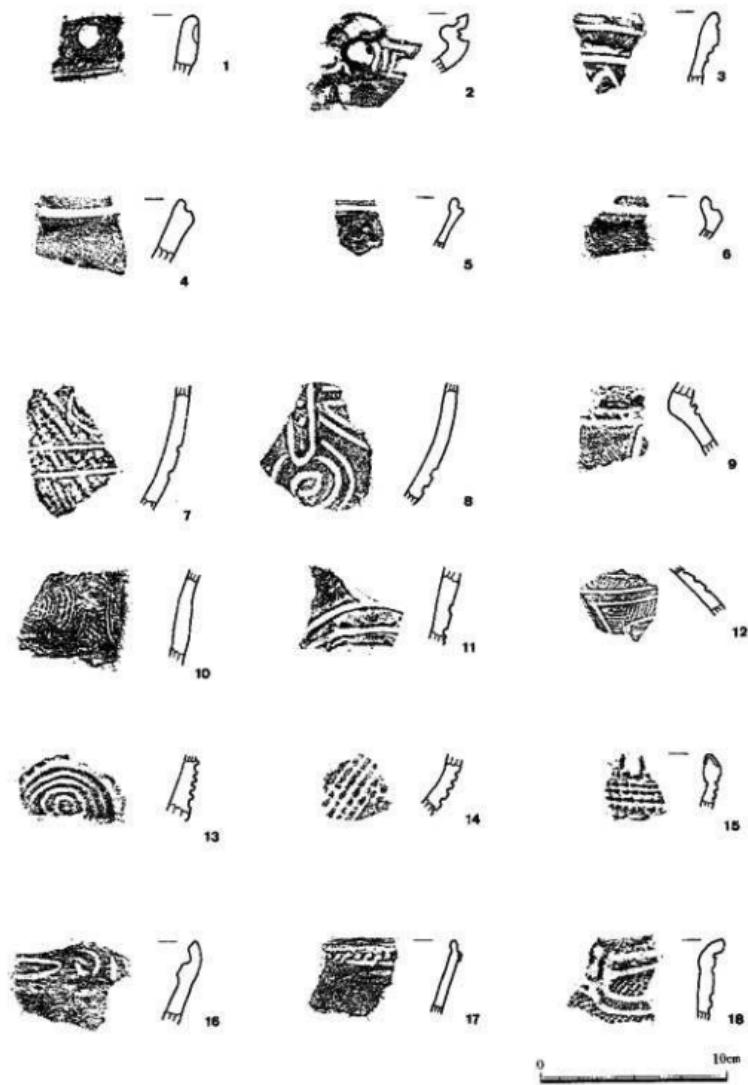


第24図 性格不明遺構(1/40)

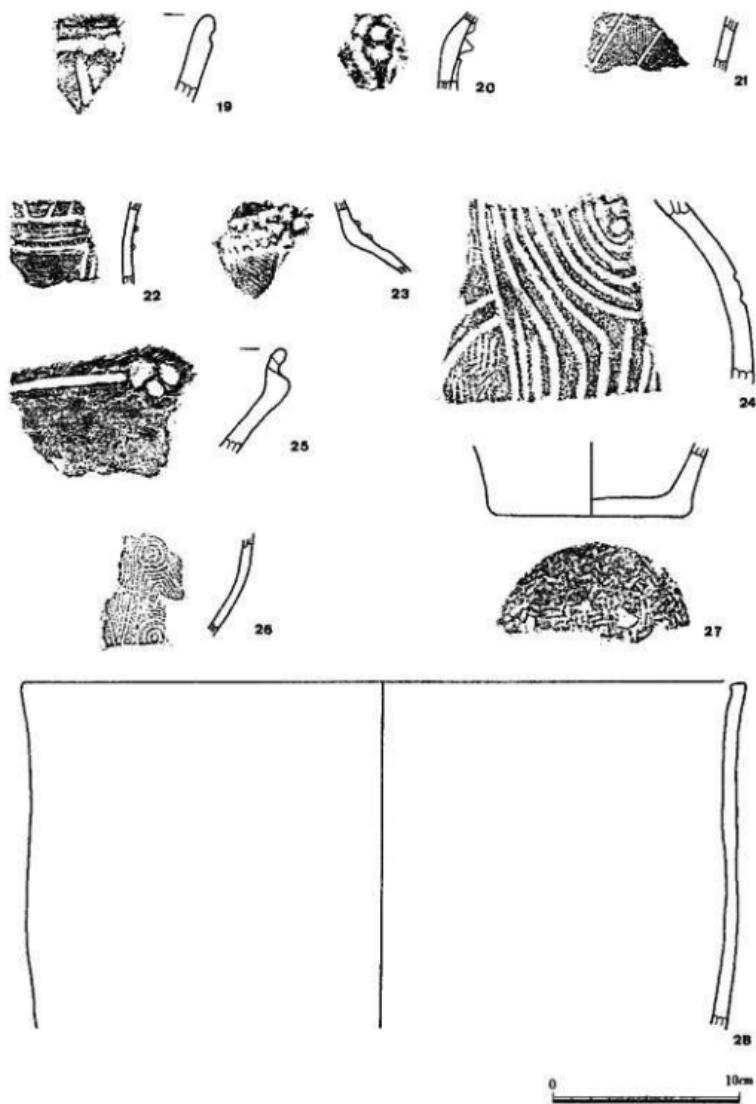


第33トレンチ

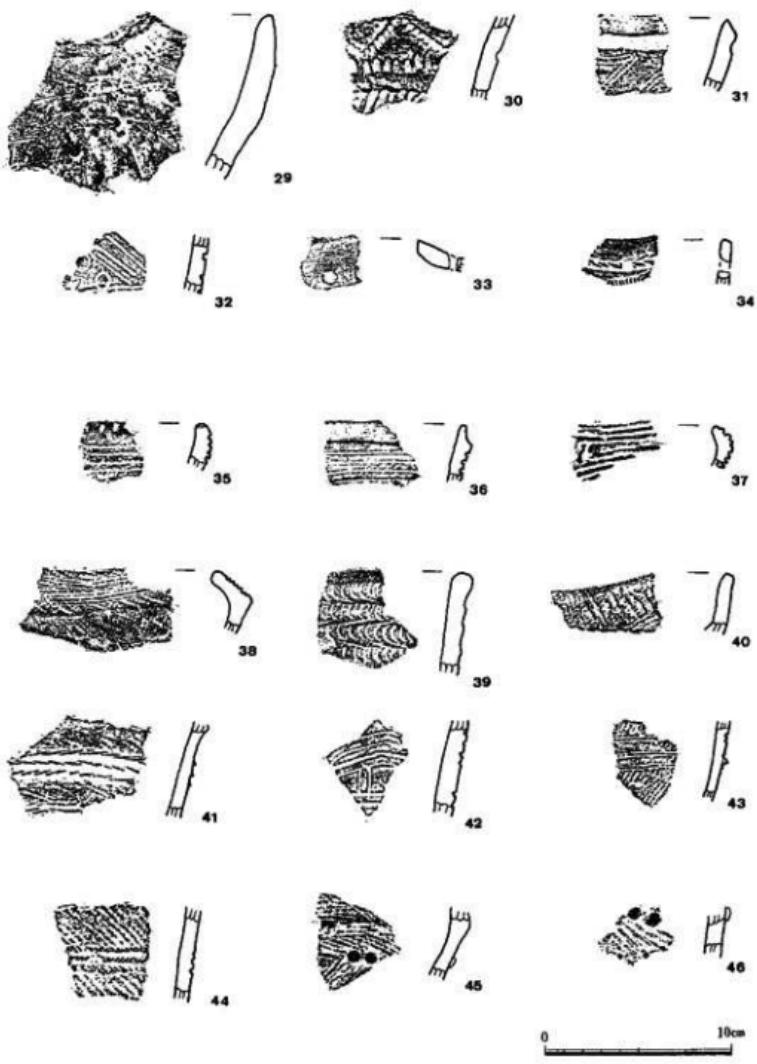
第25図 1~3号小穴(1/40)



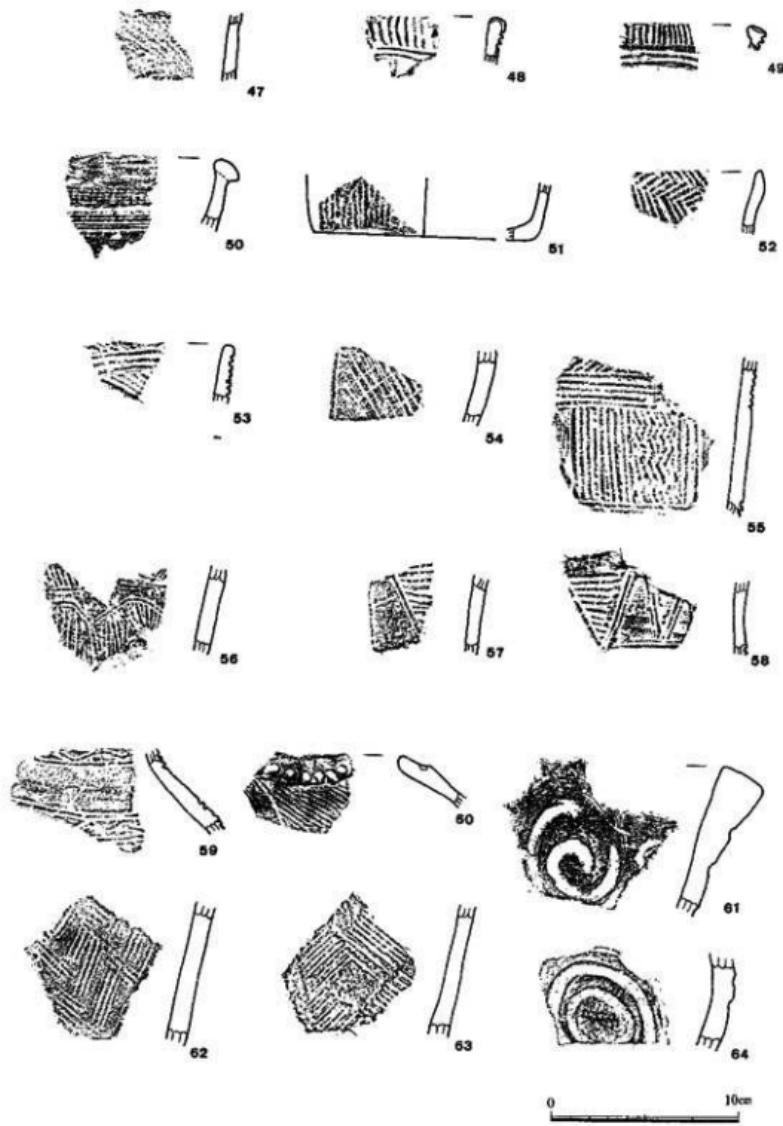
第26図 繩文土器(1)(1/3)



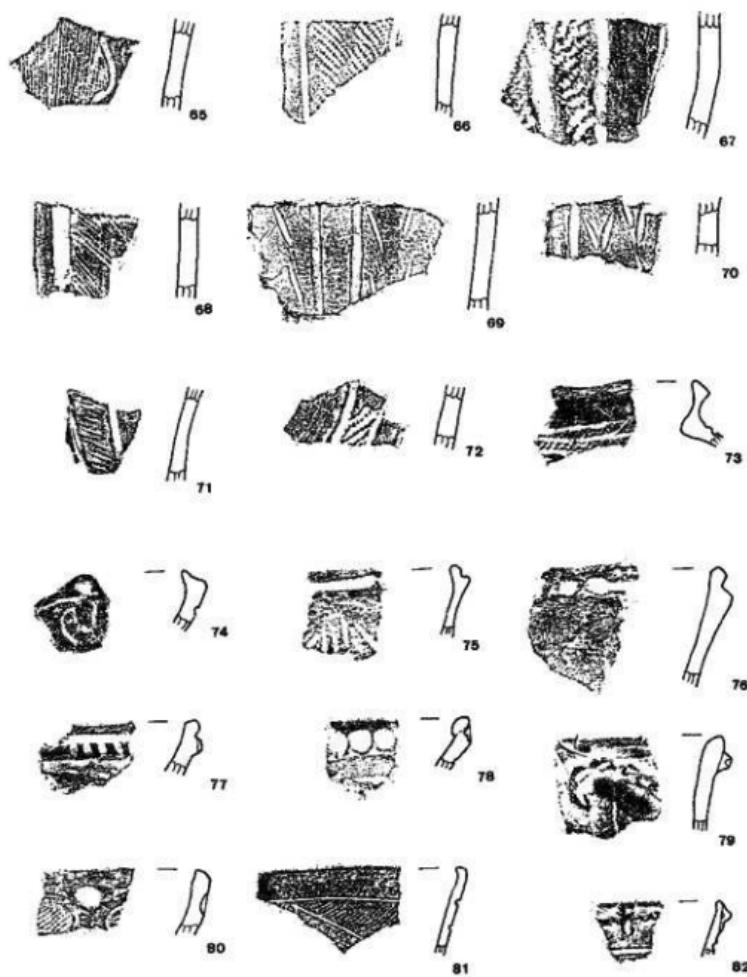
第27図 縄文土器(2)(1/3)



第28図 繩文土器(3)(1/3)

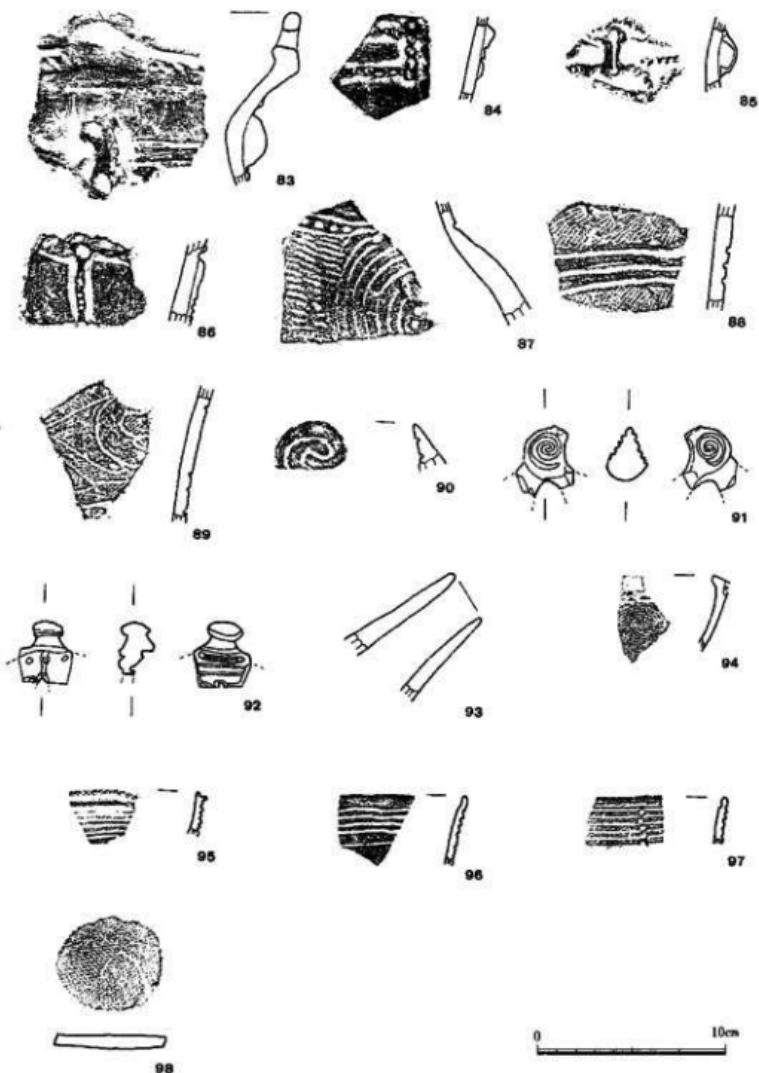


第29図 繩文土器(4)(1/3)

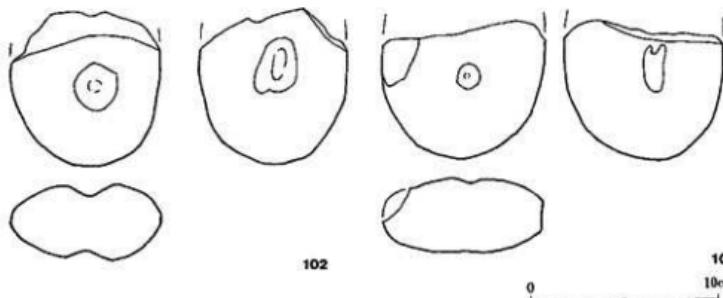
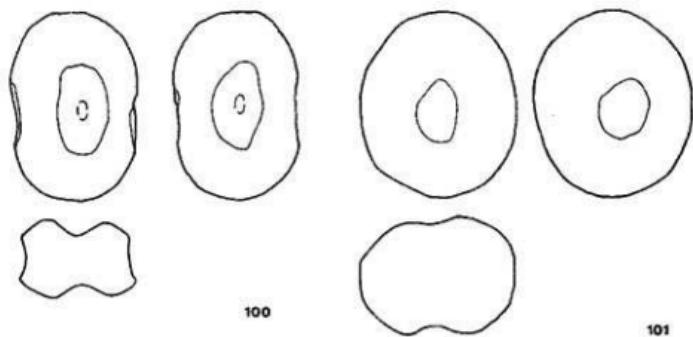
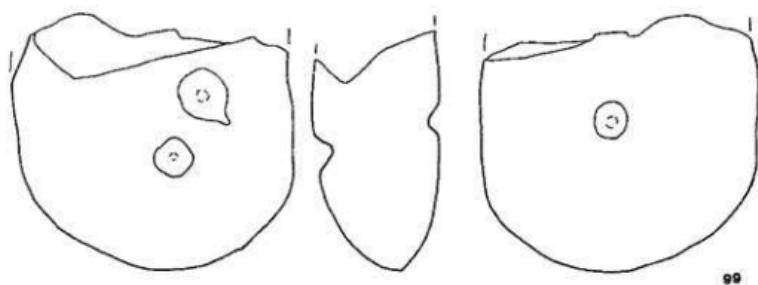


0 10cm

第30図 繩文土器(5)(1/3)



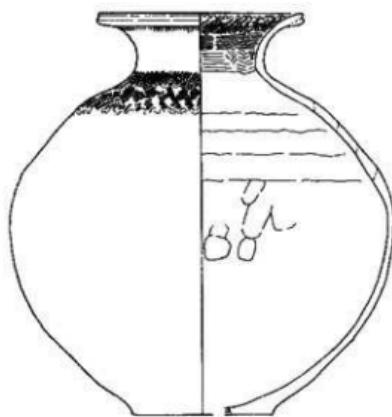
第31図 縄文土器(6)(1/3)



第32図 凹石(1/3)



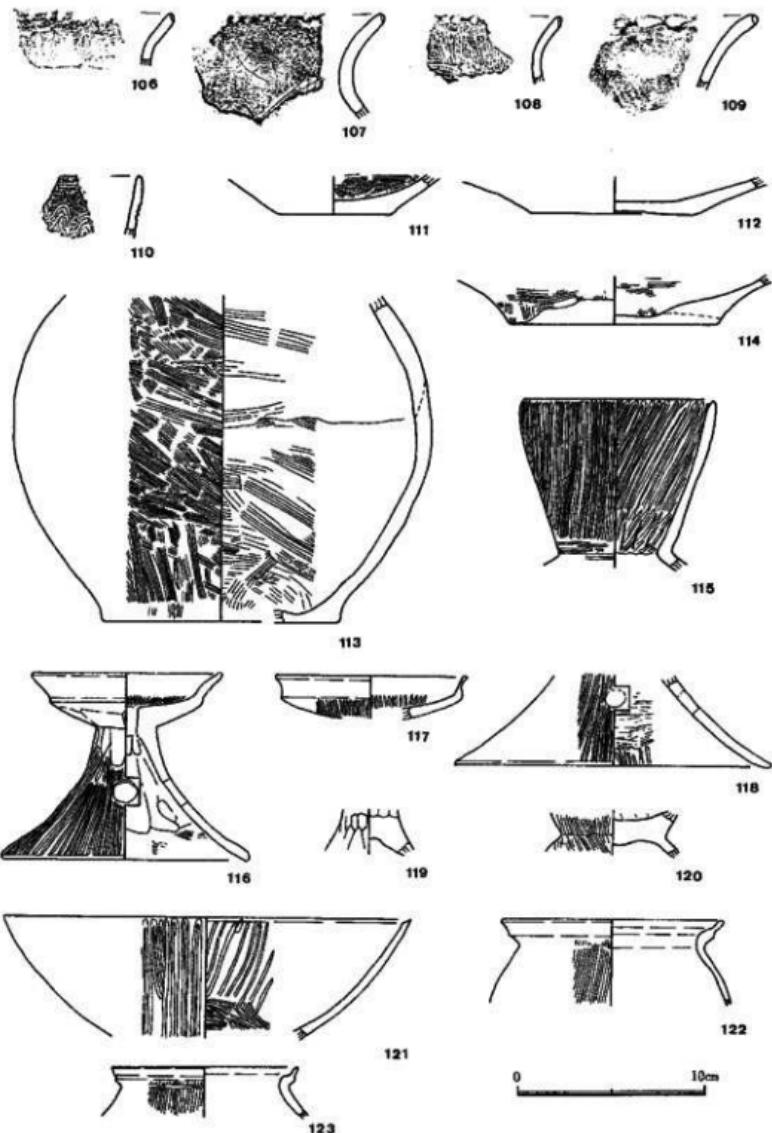
104



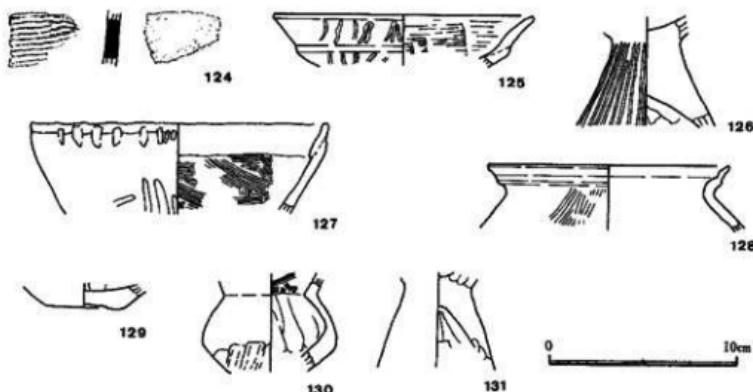
105

0 10cm

第33図 第4 トレンチ出土遺物(1/4)



第34図 第2~8・29トレンチ出土遺物(1/4)



第35図 第30-32トレンチ出土遺物(1/4)

第1表 出土遺物観察表(1)

番号	出土地	器形	法量(cm)			調整	文様	色調	焼成	胎土	備考
			口径	底径	高さ						
1	1号住居址						円形斜突文	黒灰色	良	雲母	後期前集
2	#						沈線文	橙褐色	#	密	#
3	#						"	赤褐色	#	白色粒	#
4	#						横走沈線	橙褐色	不良	砂粒	#
5	#						"	褐色	良	密	#
6	#						"	"	#	砂粒	#
7	#						圓文地文に沈線文	"	#	砂粒	#
8	#						沈線文	橙褐色	#	密	#
9	#						沈線区画内に網文R	褐色	#	雲母	#
10	#						櫛状工具による沈線	橙褐色	#	#	#
11	#						沈線文	褐色	#	#	#
12	#						沈線区画内に網文	"	#	密	#

第1表 出土遺物観察表(2)

番号	出土地	器形	法量(cm)			調整	文様	色調	焼成	胎土	備考
			口径	底径	高さ						
13	1号住居址						沈線文	橙褐色	良	雲母	中期後葉
14	#						結節状沈線文	褐色	#	砂粒	前期後葉
15	#						#	橙褐色	#	雲母	前期末葉
16	1号土坑						沈線文	#	#	#	後期前葉
17	#						網目陰線	褐色	#	白色粒	#
18	#						8の字文と沈線区画内に横文L.R	#	#	雲母	#
19	#						円形刺突文と太い沈線	椎褐色	#	砂粒	#
20	#						8の字文	褐色	#	雲母	#
21	#						沈線区画内に横文R.L	黑灰色	#	砂粒	#
22	#						網目陰線と沈線文	褐色	#	白色粒	#
23	#						8の字文	赤褐色	#	雲母	#
24	2号土坑						沈線文	橙褐色	#	#	#
25	#						横走沈線と円形刺突文	褐色	#	砂粒	#
26	#						沈線文	黑色	#	金色雲母	後期前葉
27	#		11.0				無文	橙褐色	#	砂粒	#
28	1号埋甕		39.0				#	褐色	#	小石	#
29	T-5						#	橙褐色	#	粗	早期末葉
30	3号甕						只巻腹縁による刺突文	赤褐色	#	雲母	#
31	#						木の葉状入粗文	褐色	#	密	前期後葉
32	1号甕						網文地に円形竹管文	#	#	#	#
33	4号溝	有孔土器					無文	赤褐色	#	#	#
34	1号溝	#				爪形文	#	橙褐色	#	雲母	
35	4号溝						網目縞 網文地に沈線文	褐色	#	密	#
36	4号溝						網文地に沈線文	#	#	#	#
37	1号溝						沈線文	橙褐色	#	砂粒	#
38	2号甕						網文地に沈線文	#	#	金色雲母	#
39	3号溝						爪形文	#	#	#	#
40	4号溝						網文R.L.	#	#	砂粒	#

第1表 出土遺物観察表(3)

番号	山土地	器形	法量(cm)			調 热	文 様	色調	焼成	胎 土	備 考
			口徑	底径	高さ						
41	4号溝						縦文地に斜めに刻目を入れた凸帯を巡らす	褐色	良	〃	前割後集
42	3号溝						沈線文	〃	〃	雲母	〃
43	2号溝						縦文地に半截竹管による波線	〃	〃	赤褐色	〃
44	〃						縦文R Lの地文に3本の刻目隆線	赤褐色	〃	金色雲母	〃
45	T-36						条縦地文に円形浮文	褐色	〃	砂粒	〃
46	2号溝						〃	赤褐色	〃	雲母	〃
47	3号溝						条縦	棕褐色	〃	雲母	〃
48	〃						口唇部に細い粘土縫を貼り付ける	〃	〃	〃	前割末集
49	2号溝						〃	褐色	〃	〃	〃
50	T-34						筋節状沈線文	棕褐色	〃	金色雲母	〃
51	T-5	12.0					集合沈線文	棕褐色	〃	粗	中期初頭
52	3号溝						〃	〃	〃	砂粒	〃
53	〃						〃	褐色	〃	雲母	〃
54	〃						〃	〃	〃	〃	〃
55	〃						〃	赤褐色	〃	金色雲母	〃
56	T-3						〃	褐色	〃	雲母	〃
57	T-4						三角状空白部あり	赤褐色	〃	金色雲母	〃
58	3号溝						〃	〃	〃	〃	〃
59	〃						半截竹管による沈線文	〃	〃	〃	〃?
60	T-28						円形刻夷文と縦文R L	棕褐色	〃	白色粒	中期後葉
61	T-38 13号溝						彌卷文	〃	〃	砂粒	〃
62	3号溝						櫛齒状工具による沈線	〃	〃	〃	〃
63	T-36						〃	〃	〃	雲母	〃
64	T-34						沈線文	赤褐色	〃	金色雲母	〃
65	T-36						条縦地文に蛇行沈線	棕褐色	〃	砂粒	〃
66	3号溝						垂下沈線の間に縦文R L	〃	〃	雲母	〃
67	〃						太い沈線の間に縦文L R	〃	〃	金色雲母	〃
68	T-33						縦杉文?	〃	〃	雲母	〃

第1表 出土遺物観察表(4)

番号	出土地	器形	法量(cm)			調 整	文 様	色調	焼成	胎 土	備 考
			L径	底径	高さ						
69	T-38						ハの字文	褐色	良	砂粒	中期後葉
70	#						#	橙褐色	#	#	#
71	5号溝						2本の沈線の間に羅文R	#	#	密	後期初頭
72	T-24						2本の沈線の間に羅文LR	赤褐色	#	砂粒	#
73	T-38						羅文地に沈線	褐色	#	雲母	後期前葉
74	T-24						沈線文	橙褐色	#	砂粒	#
75	#						#	褐色	#	金色雲母	#
76	#						円形刺突と沈線文	橙褐色	#	雲母	#
77	T-36						横走沈線の下に刻目凸帯	赤褐色	#	#	#
78	#						円形刺突文	橙褐色	#	砂粒	#
79	T-35						戴手状の刻目隆線	#	#	雲母	#
80	T-36						円形文と羅文L	褐色	#	砂粒	#
81	T-37 13号溝						磨消羅文	赤褐色	#	金色雲母	#
82	14号溝						8の字文	橙褐色	#	雲母	#
83	T-36						#	褐色	#	#	#
84	#						#	橙褐色	不良	砂粒	#
85	T-37						#	#	良	赤色粒	#
86	T-36						刻目隆線	#	#	砂粒	#
87	T-24						沈線文の左側に羅文	#	#	#	#
88	T-34						3本の沈線の上下に羅文L	#	#	金色雲母	#
89	T-36						磨消羅文帯	褐色	#	#	#
90	T-37 13号溝						沈線文	#	#	白色粒	# 把手
91	T-36						渦巻文	#	#	雲母	# #
92	#						8の字文	赤褐色	#	密	# #
93	#	注口土器						橙褐色	#	白色粒	#
94	T-24						曲線文	褐色	#	雲母	後期中葉
95	11号溝						沈線文と舞日	橙褐色	#	#	#
96	T-34						沈線文	褐色	#	#	#

第1表 出土遺物観察表(5)

番号	出土地	器形	法量(cm)			調 整	文 様	色調	焼成	胎 土	備 考
			口径	底径	高さ						
97	T-37						縹文地に沈線及び円形 刺突文	褐色	良 密		後期前業
98	T-24	土製円盤					縞目(土器底部を利用)	橙褐色	〃	〃	
99	7号溝	凹石					残存長 13.7cm 幅 15.0cm				安山岩
100	T-24	〃					長 10.1cm 幅 6.6cm				〃
101	3号土坑	凹石					長 10.0cm 幅 8.5cm				〃
102	T-31	〃					残存長 8.3cm 幅 9.0cm				〃
103	T-33	〃					残存長 7.4cm 幅 8.7cm				〃
104	3号溝	土師器 壺	15.0	10.8	31.5	ハケメのちヘラミガ キ ハケメ		赤褐色	良 密		底部穿孔
105	〃	〃	14.4	10.0	28.7	肩部と口縁部内面に細縦文・円形竹管・縹文底 のある板状文を施し、頸部内面にハケメ		橙褐色	不良	砂粒	〃
106	〃	弥生土器 壺				ハケメ ヘラミガキ	刻目口縁	黒色	良	白色粒	
107	〃	〃				ハケメ	〃	橙褐色	〃	砂粒	
108	T-5	〃				ハケメ	〃	黒褐色	〃	雲母	
109	7号溝	〃				ハケメ	〃	橙褐色	〃	砂粒	
110	T-29	〃					波状文	褐色	〃	密	
111	1号溝	土師器 壺		6.0		ヘラナデ ハケメ			〃	雲母	
112	T-4	〃		9.0		ミガキ ハケメ			〃	〃	
113	2号溝	〃		13.0		ハケメ			〃	〃	
114	3号溝	〃		11.2		ハケメ			〃	〃	
115	〃	堆	10.2			ヘラミガキ			〃	〃	
116	〃	小形器台	10.2	13.6	10.0	ヘラミガキ 雲母ハケメ			〃	〃	透孔3か所
117	〃	〃	10.4			ヘラミガキ			〃	〃	密
118	〃	〃		17.0		ヘラミガキ ヘラナデ			〃	〃	〃
119	〃	高杯				ヘラナデ		赤褐色	〃	雲母	
120	〃	要				ハケメ		橙褐色	〃	金色雲母	
121	5号溝	高杯				ヘラミガキ			〃	〃	
122	T-8	S字甕	12.0			ハケメ			〃	〃	砂粒
123	7号溝	〃	10.0			ハケメ			〃	〃	
124	2号住居址	須恵器 甕				タタキ		青灰色	〃	緻密	

第1表 出土遺物觀察表(6)

## 第V章・まとめ

高部宇山平遺跡は、曾根丘陵の一部を形成する宇山平と呼ばれる台地の北端に立地し、北側に向かって緩やかに傾斜する面に占地する。今回の調査地は、遺跡推定範囲の西側で主にトレンチを設定して、遺跡有無の確認を行った。

今回の調査では、堅穴住居址3軒、土坑3基、溝14条、小穴3基、性格不明遺構1基が検出された。

### 第1節 繩文時代について

繩文時代の遺構としては、第18トレンチの1号住居址、第24トレンチの1・2号土坑及び第26トレンチの3号土坑及び第24トレンチの1号屋外埋甕がある。いずれも遺構の覆土中より繩文時代後期前葉の堀之内式土器が中心に出土した。

1号住居址は、柱穴などの付属施設を検出することができます、調査区も面積が狭かったため、明確に住居址と判断できなかったが、平面プランや規模、床面の状態などから住居址と認定した。ただし、本遺構の時期を堀之内期とすると、この時期の住居の平面プランは、円形を特徴としており、本遺構の西壁と南壁は、ほぼ直線に伸びており、方形プランを呈するものと思われ、今後の検討を要する遺構である。

土坑は、今回の調査で3基検出され、出土遺物は、いずれも後期前半（堀之内式～加曾利B式）の土器が多数出土している。そのうち2号土坑は、断面が上部が垂下し、下半部になると上面プランより奥に広がる、いわゆる袋状土坑であった。

また、第24トレンチでは、1号埋甕が検出された。反位の状態で出土し、口縁部内側の地床に平石を置くなど興味深い状態で検出された。土器自体は、繩文時代後期前葉の堀之内式の粗製深鉢で、外面は、無文である。住居址に伴うものではなく、いわゆる屋外埋甕ととらえてよいであろう。

出土遺物は、早期末葉、前期後葉の諸磯b式、同c式、前期末葉の十三菩提式、中期初頭の五領ヶ台式、中期後葉の曾利式、後期初頭の称名寺式、後期前葉の堀之内式、後期中葉の加曾利B式の土器が多数、耕作土や遺構の覆土中から出土している。

今回の調査で、ある程度の出土傾向がつかめた。すなわち、遺跡北部では、第1～6トレンチの方形周溝墓群の覆土中より前期後葉から中期初頭にかけての土器が中心に出土し、第20トレンチより南側では、中期後葉から後期前半の土器が多数出土した。これらの地点を地形的に見ると、第20トレンチより第39トレンチにかけては、やや緩やかに北側に向かって傾斜しているものの、第34～39トレンチ付近は、ほぼ平坦な地形が広がり、第14～19トレンチ付近より第7トレンチにかけては、傾斜がきつくなり、再び第1～6トレンチ付近で平坦な地形となり、

そこに以下に述べる伊勢塚古墳や方形周溝墓群が形成されていく。つまり、遺物の分布状況から遺跡内において前期後葉から中期初頭にかけては、北側に生活の場があったものが、中期後葉以降、南側に移り変わったようである。

## 第2節 弥生時代について

今回の調査では、弥生時代の遺構は、検出されなかったが、弥生時代後期と思われる刻目口縁甕の破片が4点と櫛描波状文を施す甕の破片が1点出土している。

なお、第1～6トレンチより50mほど東にて、昭和46～47年に中期後葉の長床式の壺が出土しており、弥生時代にも遺跡内で生活の場があったのであろう。

## 第3節 古墳時代について

古墳時代の遺構で注目されるのが溝であり、同時代と思われるものは、11条確認できた。恐らく、それらの大部分が填墓の周溝であることが推測できる。特に、第1～6トレンチで出土した2～7号溝の方形周溝墓（群）は、豊富村内で初めての発見である。特に、3～5号溝は、1基の方形周溝墓を形成する溝である。その規模は、東西幅12m、南北幅9.4mである。その他の周溝墓がどのように配置されているかは、不明である。

出土遺物を見てみると、3号溝からの出土が一番多かったが、壺、S字甕、小形器台、高坏などが出土し、特に壺では、肩部と口縁部内面に細繩文と細い竹管による円形文を施した東海地方のパレススタイル土器を思わせるものも出土している。出土遺物の大部分は、周溝確認面に近いレベルでの覆土上部層からの出土が多かった。木・金属製品は、出土しなかった。

また、5号溝の東西軸東側の底面に、東西幅155cm、南北幅85cm以上の落ち込みが見られた。特に、ここから供獻された状態で土器は、出土していないが、溝内埋葬が行われた可能性があり、注目される。

出土遺物から方形周溝墓群は、古墳時代前期であることがわかるが、豊富村周辺で出土する方形周溝墓を見てみると、中道町上の平遺跡では、124基という広大な墓域群が検出されており、三珠町上野遺跡で4基、同町一条氏館跡遺跡では、第1～3次調査の中で15基が確認されているが、いずれも弥生時代後期から古墳時代前期にかけてであり、主に弥生時代後期を中心となる。いずれにしても、曾根丘陵の西部地域（中道～豊富～三珠）では、方形周溝墓という墓制を弥生時代後期から古墳時代前期という期間に採用していた根拠となる資料が増えたことは、大変意義深くて今後は、被葬者の構成や性格、墓域と集落の位置関係など不明な点が多く、今後の検討課題としたい。

また、第1・2トレンチで弧を描くように1号溝が確認できた。この調査区の道を隔てた北

側に伊勢塚古墳と呼ばれる古墳がある。詳細な構造は、不明だが竪穴式石室をもつ円墳とされ、現在、東西29m、南北27m、高さ3mほどの規模を有する。1号溝は、伊勢塚古墳の墳丘を廻るかのように検出され、本遺構は、伊勢塚古墳の周溝と思われる。今回のトレンチ調査で、南側の立ち上がりの1部しか確認できていないが、平面プランを基に径を推定してみると約33mとなる。

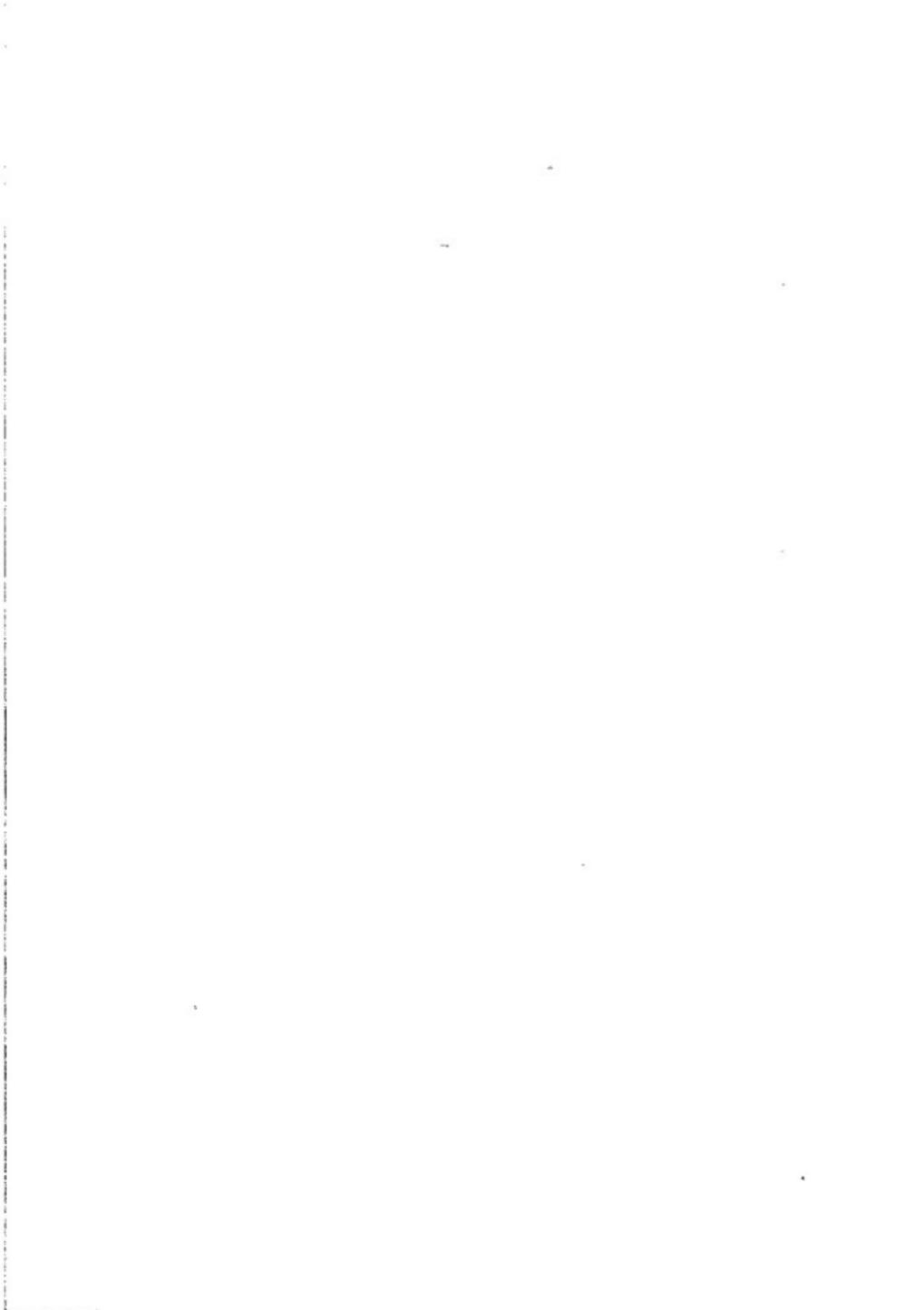
そもそも、この宇山平一帯は、宇山平古墳群と呼ばれ、昭和初期ごろには、10基程の小円墳が残されていたらしいが、その後の開墾により、伊勢塚古墳と王塚古墳が現存しているにすぎないのが現状である。

王塚古墳は、全長61.2m、高さ4mの帆立貝式古墳で、後円部から出土する円筒埴輪は、川西編年の前IV期に当たり、5世紀後半と思われる。この古墳の内部施設は、天井部の蓋石が屋根状に組み合わされており、朝鮮半島に起源を求める合掌形石室と呼ばれる特異な構造を有する竪穴式石室である。この合掌形石室は、県内では唯一の例であり、むしろ長野県を中心として分布しており、王塚古墳の被葬者は、信濃国との何らかの交流があったことが指摘できるのではないだろうか。豊富村内で埴輪を有する古墳としては唯一であり、横矧板紙留式短甲2、頸鎧1、挂甲1、小札紙留式眉庇付舟1、鉄鋤3、鐵劍5、鑿1、直刀8、鐵鎌約500本と大量に副葬品が出土し、これらのことから王塚古墳は、豊富地域を支配していた盟主的存在の古墳といえよう。このような古墳が宇山平に築造されたのは、前段階の4世紀には、2~7号溝の方形周溝墓が造られており、この宇山平一帯が墓域としてすでに確立していたからであり、当時の政治状況、すなわち、中道勢力の衰退を契機にその周辺地域の豊富・八代・三珠地域の勢力が台頭し、王塚古墳のような中規模クラスの古墳を造れるまでに成長した結果であろう。

宇山平古墳群には、王塚古墳や伊勢塚古墳を含め、10基が認められていて、今回新たに発見した古墳の周溝として確実に認めることのできる11・13号溝を始め、2基以上の古墳を確認されるに至ったことは、大きな成果といえるであろう。ただ、11号溝からは、S字甕の口縁部1点と甕(?)の破片が1点、13号溝からは、土師器が1点も出土せず、出土遺物の少なさから時期決定は、困難を極め、今後の課題としたい。

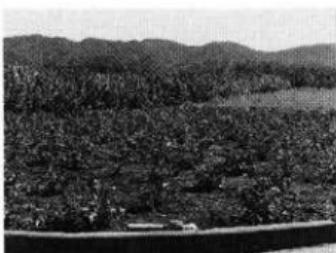
## 引用・参考文献

- 1 松平定能編 文化11年(1814)『甲斐國志』(佐藤八郎他校訂『甲斐國志』大日本地誌大系44~48)
- 2 仁科義男 1931 「大丸山古墳・大塚古墳」『史蹟名勝天然紀念物調査報告』5 山梨県
- 3 仁科義男 1934 「東八代郡右左口村豊富村西八代郡大塚村古墳群の調査」『史蹟名勝天然記念物調査報告』8 山梨県
- 4 森和敏他 1973 『金川曾根地区大規模農道建設及び細地帯土地総合改良事業関係埋蔵文化財緊急発掘調査概報』 山梨県教育委員会
- 5 豊富村 1974 『建村百年史』
- 6 山梨県教育委員会 1977 『笛吹川沿岸土地改良事業地域内埋蔵文化財分布調査報告書』
- 7 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2
- 8 小林秀夫 1978 「合掌形石室の諸問題」『中部高地の考古学』
- 9 矢本博文 1980 「甲斐の円筒埴輪」『丘陵』8
- 10 市立市川考古博物館 1982 『シンボジウム堀之内式土器』
- 11 矢本博文 1984 「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地—その歴史と地域性』
- 12 東海埋蔵文化財研究会 1986 『矢山式土器とその前後』
- 13 小野正文 1986 『祝迦堂I』 山梨県教育委員会
- 14 小野正文 1987 『祝迦堂II』 山梨県教育委員会
- 15 中山誠二 1987 『上の平遺跡—第4次・第5次発掘調査報告書』 山梨県教育委員会
- 16 保坂康夫 1987 『横彌遺跡・弥二郎遺跡』 山梨県教育委員会
- 17 小林公明他 1988 『唐渡宮』 長野県富士見町教育委員会
- 18 清水博他 1988 『一条氏館跡遺跡』 三珠町教育委員会
- 19 堀ノ内泉 1989 『上野遺跡』 三珠町教育委員会
- 20 新津建 1989 『金生遺跡II(繩文時代編)』 山梨県教育委員会
- 21 長沢宏昌 1989 『花鳥山遺跡・水呑場遺跡』 山梨県教育委員会
- 22 小林広和他 1991 『上の平遺跡—第1・2・3次調査』 山梨県教育委員会
- 23 清水博他 1991 『一条氏館跡遺跡—第2次・第3次調査報告書』 三珠町教育委員会
- 24 曾根丘陵研究グループ 1991 「甲府盆地南縁に見られる活断層に関する新事実」『地球科学』





高都宇山平遺跡遠景（東から）



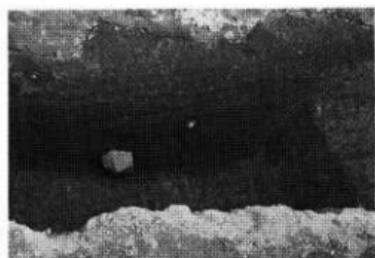
調査前風景（第1～6トレンチ付近）



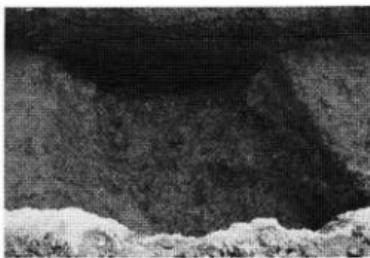
作業風景



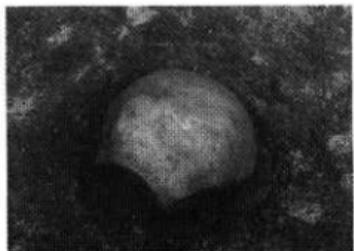
伊勢塚古墳（東から）



1号溝東壁土壁



2号溝



2号溝土器出土状況



3号溝土器出土状況



3・5号溝



4・5号溝



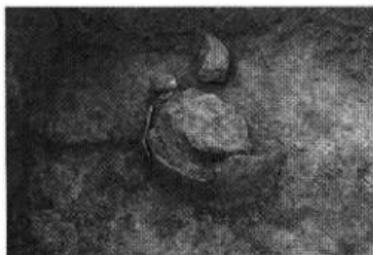
5号溝（第5レンチ）



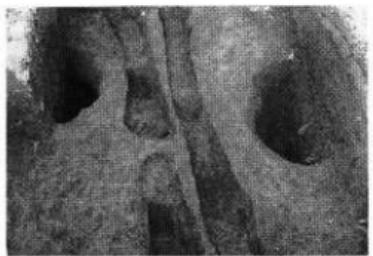
7号溝



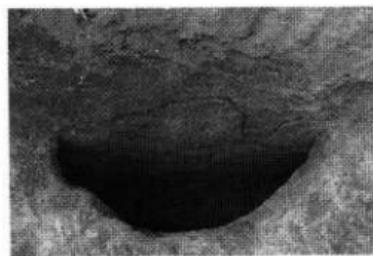
1号住居址土器出土状況



1号屋外埋甕



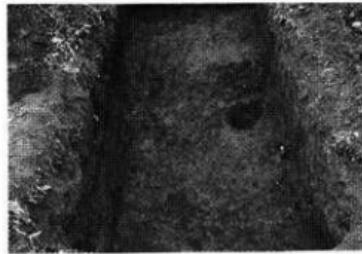
第24トレンチ



2号土坑



3号土坑



2号住居址



3号住居址北壁土層



11号溝



12号溝



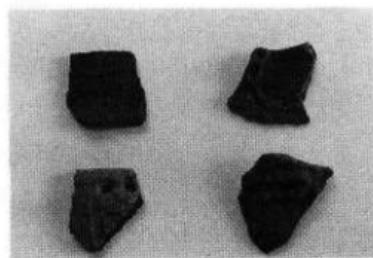
13号溝（第37トレンチ）



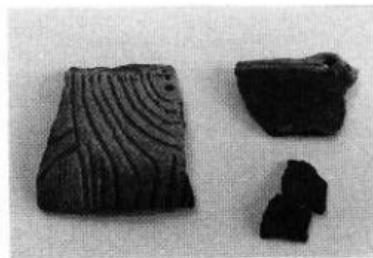
13号溝（第38トレンチ）



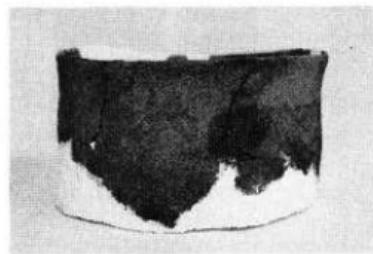
13号溝北壁土層（第37トレンチ）



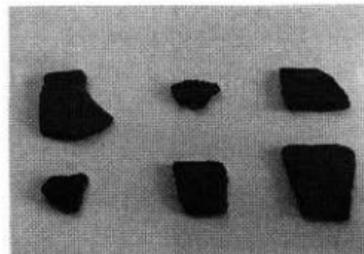
1号土坑出土土器



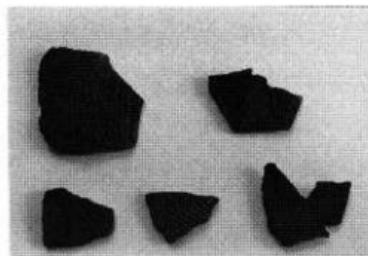
2号土坑出土土器



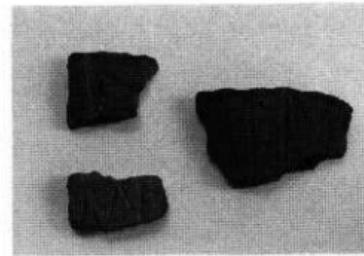
1号屋外埋壺



縄文土器(1)



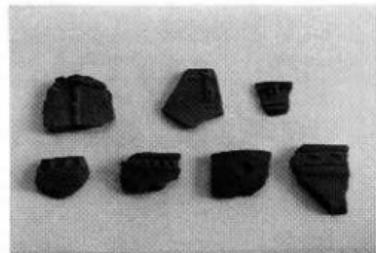
縄文土器(2)



縄文土器(3)



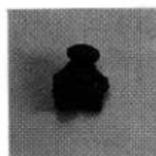
縄文土器(4)



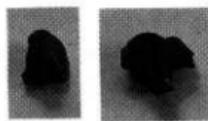
縄文土器(5)



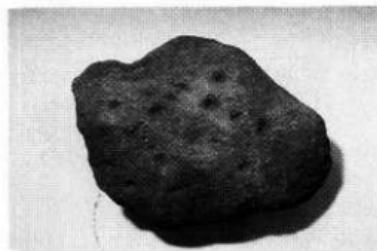
縄文土器(6)



縄文土器(7)



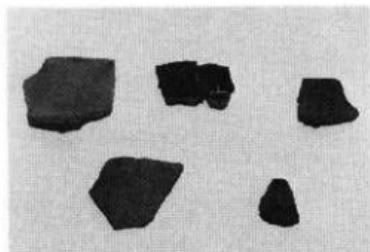
縄文土器(8)



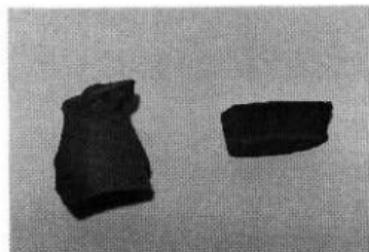
凹石(1)



凹石(2)



弥生土器



2号住居址出土土器



2号溝出土土器



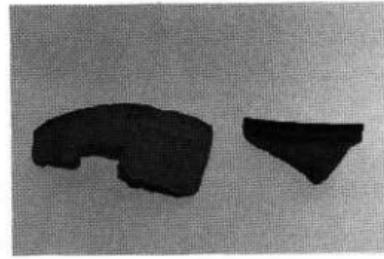
3号溝出土土器(1)



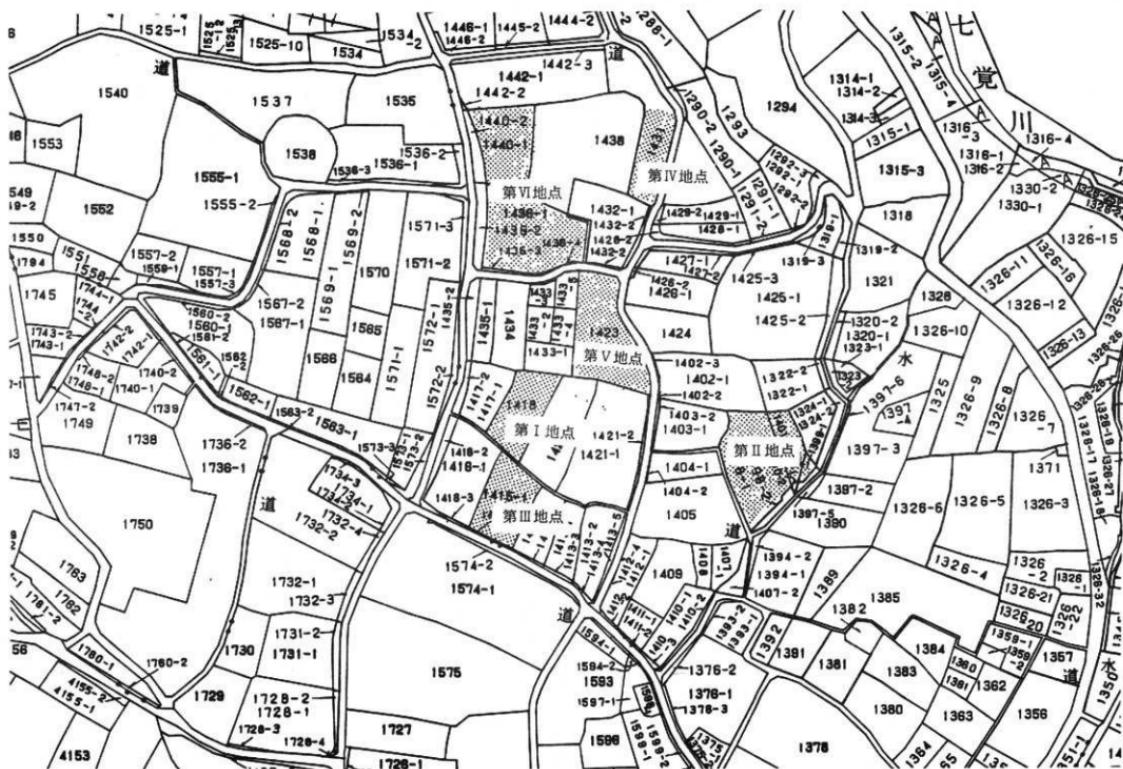
3号溝出土土器(2)



3号溝出土土器(3)



11号溝出土土器



第1図 第I～VI地点位置図(1/1500)

## 平成2年度高部宇山平遺跡の調査

### はじめに

豊富村では、宇山平地区を住宅用地とするために埋蔵文化財の範囲確認調査を平成2年度より進めてきた。当地は、高部宇山平遺跡・大鳥居宇山平遺跡が分布し、王塚古墳や伊勢塚古墳といった古墳が築造されるなど歴史的環境に恵まれた地域であり、宇山平一帯に広がる畑地で縄文土器などが表採できることからも当地に遺跡が分布していることは、明らかである。

そこで、今後の開発に対応するための参考資料として平成2~4年度に6地点ほど行われた調査の概要を付編として報告する。

### 調査組織

**調査主体** 豊富村教育委員会

**調査担当者** 岡野秀典

**事務局** 渡辺昭雄（教育長 平成2年7月10日就任）・有泉善博（教育課長）・田中正八（社会教育係長）・今井賢・小池恵子・河野義男・大村俊枝

**調査参加者** 志村勝子・志村茂子・近藤百代・近藤明美・石原次代・石原花子・石原光子・桜井幸子・塙田恵美子・山口清子（順不同）

## 第Ⅰ章 第Ⅰ地点

### 1. 調査経緯

平成2年4月23日 文化庁に発掘届提出

平成2年5月1日 発掘調査を開始

平成2年7月2日 発掘調査終了

平成2年7月5日 南甲府警察署に遺物発見届を提出

m×4mを4か所の計13か所の試掘坑を設定して掘り下げた。また、9・13以外で住居址が確認されたので、両区を拡張した。

本地点の基本層序は、次のとおりである。

第Ⅰ層 褐色土層（表土）

第Ⅶ層 暗褐色土層

第Ⅱ層 “ (耕作土)

第Ⅵ層 黒褐色土層

第Ⅲ層 暗褐色土層(“)

第Ⅶ層 明褐色土層

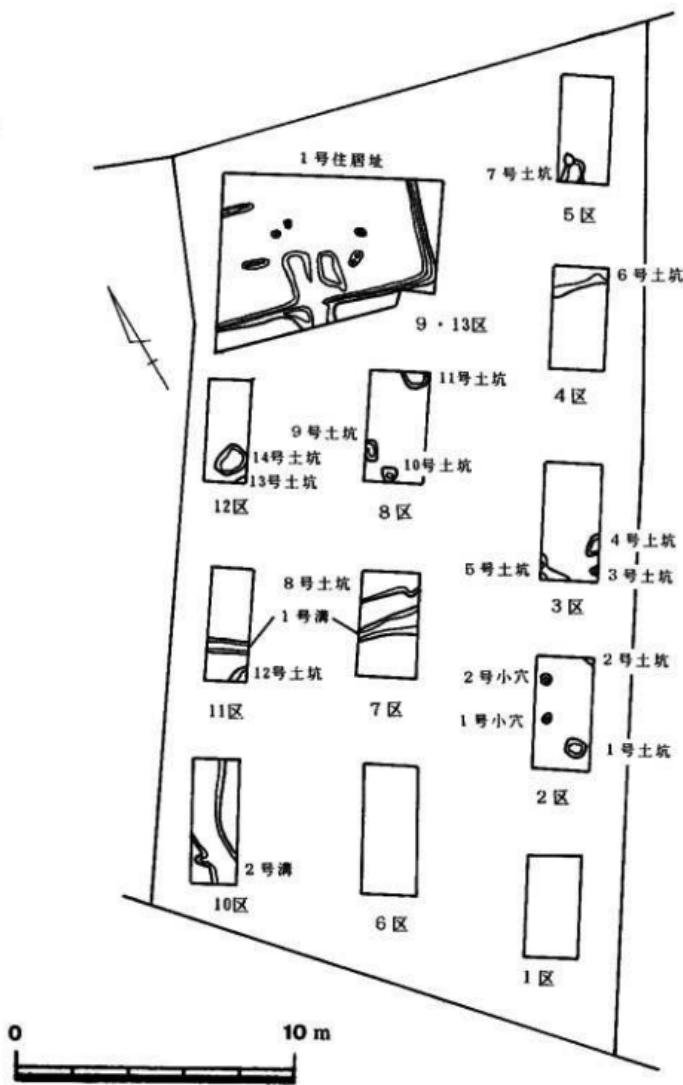
第Ⅳ層 褐色土層第

第Ⅷ層 黄褐色ローム層

### 2. 遺跡の概要と層位

第Ⅰ地点は、東八代郡豊富村高部1418に所在し、台地北側のやや低まった平坦地に立地する。

調査方法は、調査対象地に任意に2m×4mを9か所、1.5



第2図 第1地点全体図(1/200)

### 3. 検出された遺構と遺物

#### (1) 2 区

##### 1号土坑

長軸75cm、短軸55cmの隅丸方形を呈し、深さ15cmである。出土遺物はない。

##### 2号土坑

プランの大部分が調査区外にあるため、詳細は不明であり、長さは115cm以上、深さ50cmである。出土遺物は、縄文土器片がある。

##### 1号小穴

長軸30cm、短軸25cmの楕円形を呈し、深さ25cmである。出土遺物はない。

##### 2号小穴

径30cmの不整円形を呈し、深さは50cmである。出土遺物は、時期不明の土器細片がある。

#### (2) 3 区

##### 3号土坑

径30cmの円形を呈し、深さ30cmである。出土遺物はない。

##### 4号土坑

長軸50cm以上、短軸35cmの楕円形を呈し、深さは30cmである。出土遺物はない。

##### 5号土坑

長軸120cm以上、短軸75cm以上の不定形を呈し、深さ40cmである。出土遺物はない。

#### (3) 4 区

##### 6号土坑

方形プランを呈すると思われる。長軸190cm以上、短軸115cm以上、深さ18cmを測る。出土遺物は、縄文土器片、土師器片が出土している。

#### (4) 5 区

##### 7号土坑

不定形プランを呈し、北側に小穴状の落ち込みをもつ。長軸100cm以上、短軸80cm、深さ35cmである。出土遺物は、縄文土器片、土師器片がある。

#### (5) 7 区

### 8号上坑

方形プランを呈すると思われる。長軸210cm以上、短軸110cm以上、深さ30cmである。出土遺物は、縄文土器片がある。

### 1号溝

東西方向に走り、11区でその延長が確認できた。覆土は、耕作土と同じなので時期的に古いものではない。最大幅95cm、深さ25cmである。出土遺物は、時期不明の土器細片がある。

### (6)8区

#### 9号土坑

長軸60cm以上、短軸35cmの橢円形を呈し、深さ25cmである。出土遺物は、縄文土器がある。

#### 10号土坑

長軸80cm、短軸35cmで隅丸長方形を呈し、深さ10cmである。出土遺物はない。

#### 11号土坑

長軸90cm、短軸60cmの隅丸方形を呈し、深さ25cmである。出土遺物は、土師器の高杯がある。

### (7)9・13区

#### 1号住居址（第3～7図）

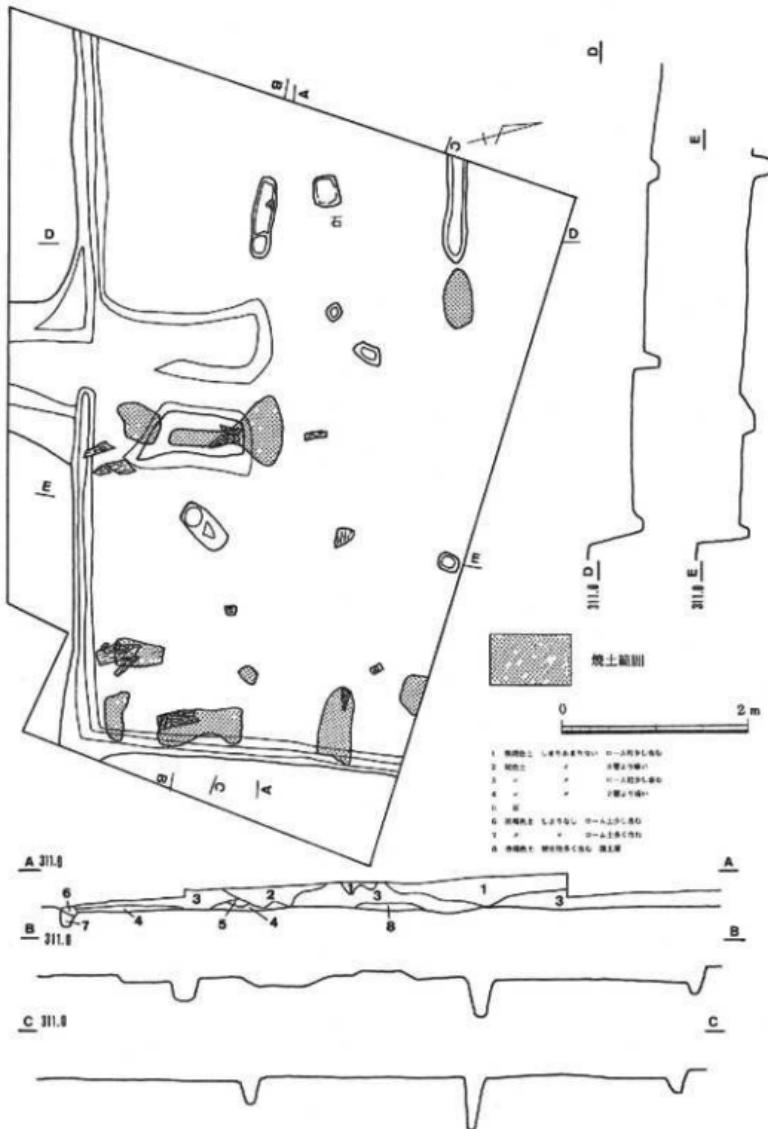
9・13区で検出され、9区と13区の間と13区の南側を拡張してプランの規模の把握に努めた。方形プランを呈するが、隅丸か否かは、不明である。主軸は、N-19°-Eである。東西幅780cm以上、南北幅530cm以上で、南壁は50cm、東壁は30cmの高さをもち、壁面は、やや外傾する。南壁のほぼ中央に南北長75cm以上、東西幅150cmの方形張り出し部があり、入口部と思われる。周溝は、張り出し部以外に全周し、幅20～30cm、深さ10cmを測る。床面は固くしまっていた。ピットは6基見られ、北西側に幅20cmの間仕切り用と思われる溝が東西方向に走っていた。住居東側には、焼土・炭化材が残存しており、火災に遭って焼失したらしい。

出土遺物は、古墳時代中期の和泉式土器で、壺・壺・壇・高杯・納が出土し、縄文土器片も混入していた。その他、刀子と思われる鉄製品が1点、砥石が1点出土した。

### (8)10区

#### 2号溝（第8図）

南北方向に走り、幅は125cm、深さ50cmを測る。出土遺物は、古墳時代後期の土師器で高杯・壺の口縁部が出土した。



第3図 第I地点1号住居址(1/60)

(9)11区

12号土坑

形状不明で、幅90cm以上、深さ40cmである。出土遺物はない。

(10)12区

13号土坑

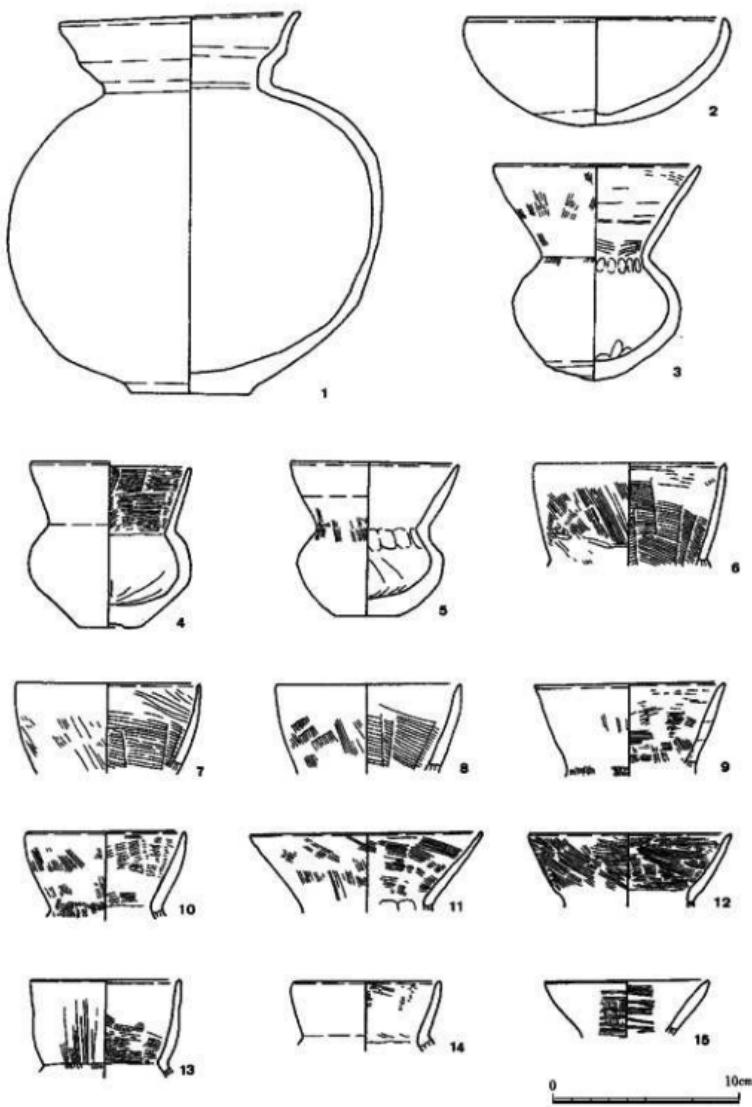
形状不明で、幅75cm以上、深さ65cmである。出土遺物はない。

14号土坑

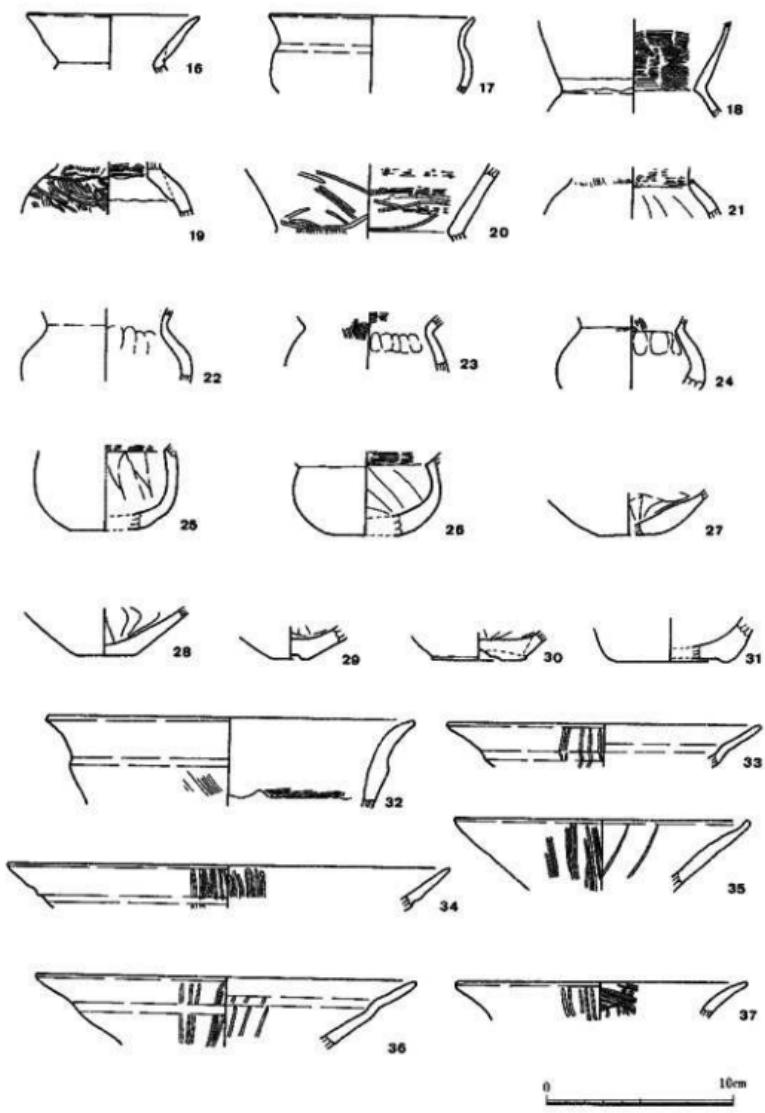
不定形を呈し、長軸115cm、短軸80cmである。出土遺物はない。

4.まとめ

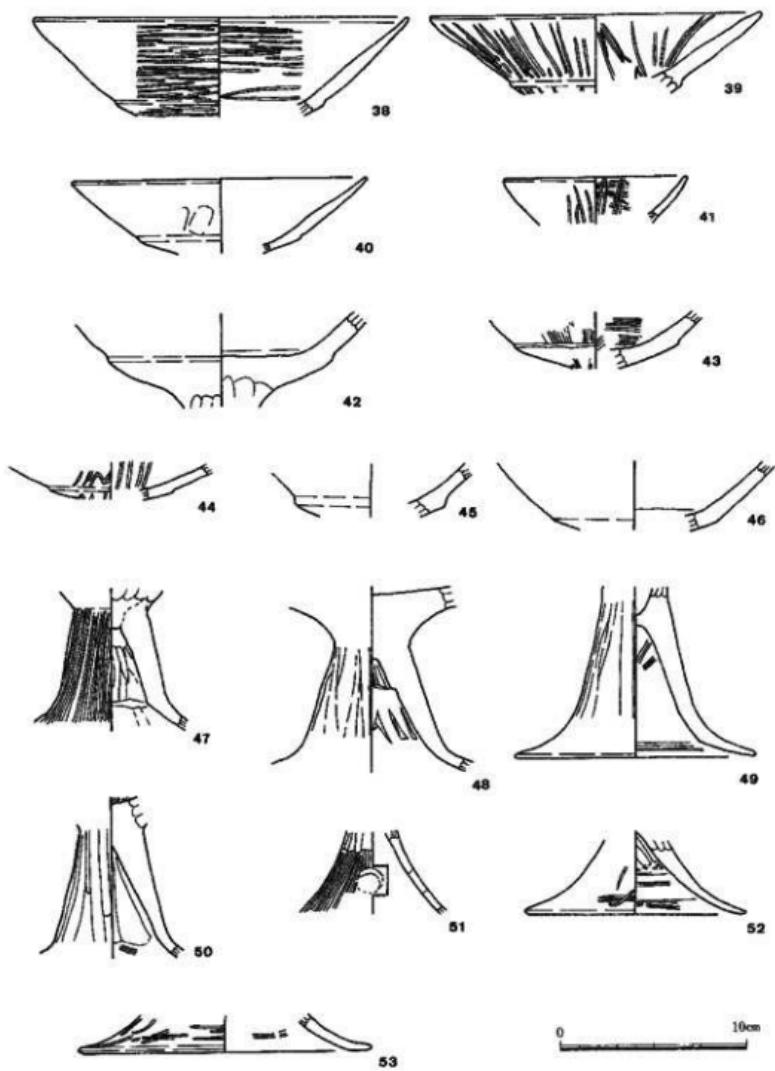
今回の調査で時期がわかるものは、古墳時代中期の1号住居址と古墳時代後期の2号溝で、その他は、時期不明である。山梨県内では、中期の住居址や土器の出土が意外に少なく貴重な発見であった。



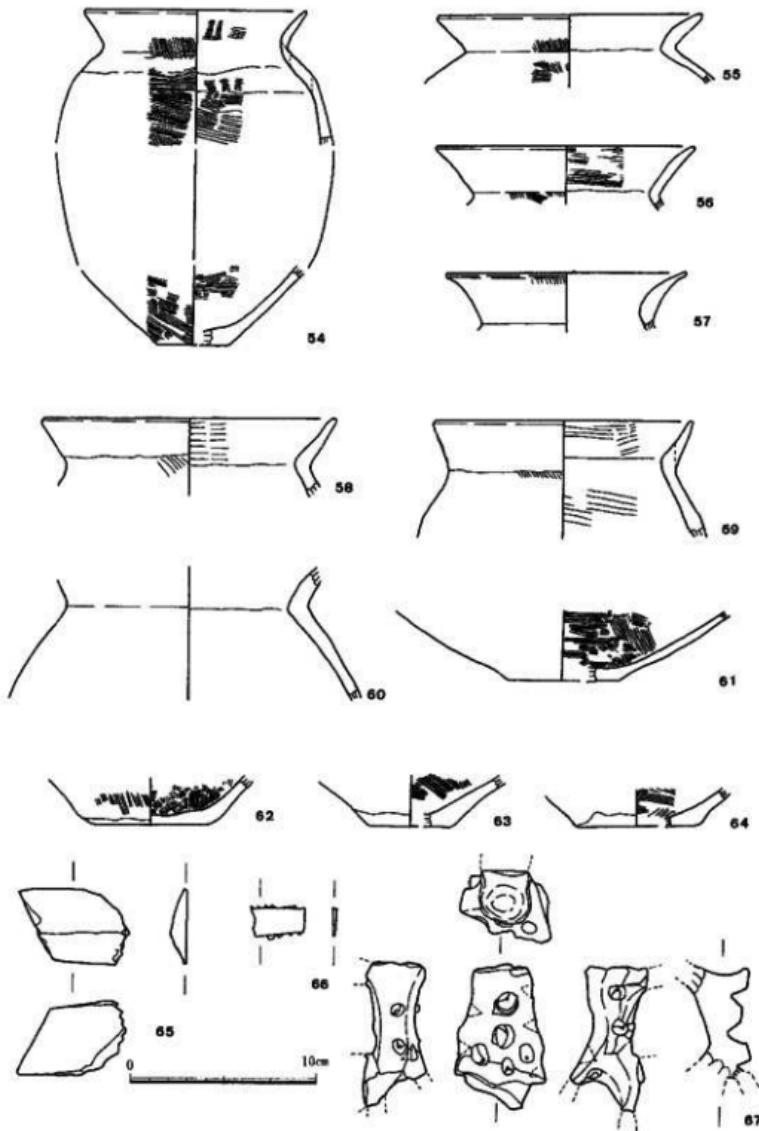
第4図 第I地点出土遺物(1)(1/3)



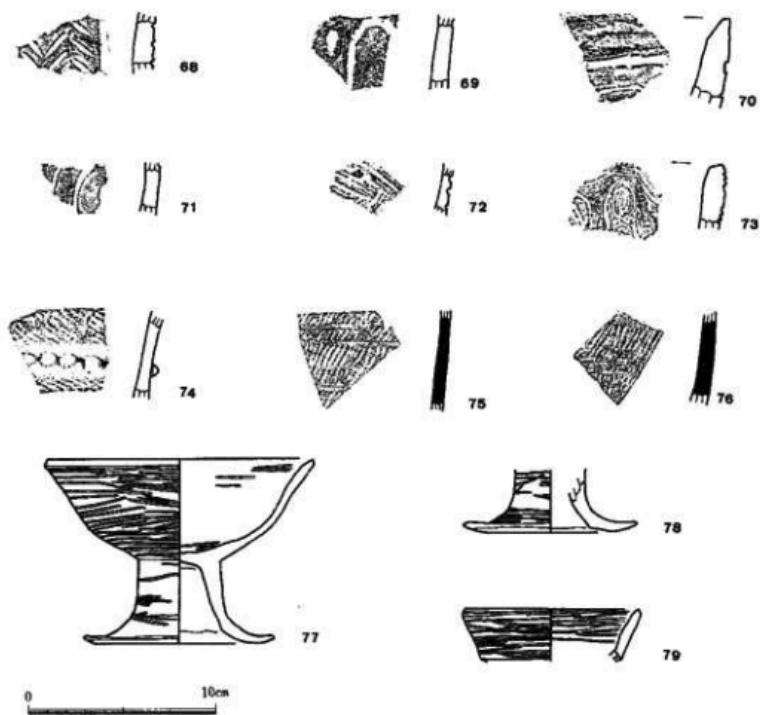
第5図 第I地点出土遺物(2)(1/3)



第6図 第I地点出土遺物(3)(1/3)



第7図 第1地点出土遺物(4)(1/3)



第8図 第I地点出土遺物(5)(1/3)

第1表第I地点出土遺物観察表(1)

番号	出上地	器形	法量(cm)			調 整	文 横	色調	焼成	胎 土	備 考
			口径	底径	高さ						
1	1号住居址	土器 壺	12.9	6.4	20.8	ヘラナデ		橙褐色	良 密		
2	"	碗	14.0		5.8	ヨコナデ		"	"	雲母	
3	"	小形壺	11.2		11.6	ハケメのちナデ		"	"	"	
4	"	"	8.6	3.4	8.9	ヘラナデ ハケメ ユビナデ		赤褐色	"	"	
5	"	"	9.0	3.4	8.3	ヘラナデ ハケメ ユビナデ		橙褐色	"	白色粒	

第1表第I地点出土遺物觀察表(2)

番号	出土地	器形	法量(cm)			調整	文様	色調	焼成	胎土	備考
			口径	底厚	高さ						
6	1号住居址	上圓器 小形壺	10.4			ハケメ		橙褐色	良	白色粒	
7	"	"	10.0			"		褐色	"	金色雲母	
8	"	"	10.0			"		"	"	白色粒	
9	"	"	10.4			ハケメのちナデ ハケメ		橙褐色	"	雲母	
10	"	"	8.6			"		黒色	"	白色粒	
11	"	"	12.6			"		橙褐色	"	雲母	
12	"	"	11.0			ハケメ		"	"	"	
13	"	"	8.2			"		"	"	赤色粒	
14	"	"	8.0			ヨコナデ ハケメ		赤褐色	"	白色粒	
15	"	"	9.0			ハケメのちヘラミガ キ ヘラミガキ		"	"	雲母	
16	"	"	9.4			ヨコナデ		橙褐色	"	"	
17	"	"	11.0			ナデ		"	"	砂粒	
18	"	"				ハケメのちナデ ハケメ		褐色	"	雲母	
19	"	"				ハケメのちヘラミガ キ		橙褐色	"	砂粒	
20	"	堆				ヘラミガキ ハケメ のちヘラミガキ		"	"	白色粒	
21	"	小形壺				ハケメ ユビナデ		"	"	砂粒	
22	"	"				ヘラナデ		赤褐色	"	白色粒	
23	"	"				ハケメ		黒色	"	"	
24	"	"				ナデ		橙褐色	"	砂粒	
25	"	"				ナデ ユビナデ		"	"	雲母	
26	"	"	3.6			"		褐色	"	雲母	
27	"	"	3.0			"		明褐色	"	金色雲母	
28	"	"	3.0			"		褐色	"	"	
29	"	"	2.0			"		橙褐色	"	白色粒	
30	"	"	5.0			"		褐色	"	"	
31	"	"	6.0			ヘラナデ		黒褐色	"	雲母	
32	"	高杯	20.0			ヘラナデ		橙褐色	"	小石	
33	"	"	17.0			ヘラミガキ		"	"	赤色粒	

第1表第1地点出土遺物観察表(3)

番号	出土地	器形	法量(cm)			調整	文様	色調	焼成	胎土	備考
			口径	底径	高さ						
34	1号住居址	土器 高环	24.0			ハラミガキ		橙褐色	良	雲母	
35	"	"	16.0			"		赤褐色	"	砂粒	
36	"	"	20.6			"		"	"	赤色粒	
37	"	"	15.6			"		橙褐色	"	砂粒	
38	"	"	20.0			"		赤褐色	"	赤色粒	
39	"	"	18.0			"		橙褐色	"	白色粒	
40	"	"	16.0			ナデ		"	"	赤色粒	
41	"	"	10.0			ハラミガキ ハケメ のちハラミガキ		褐色	"	雲母	
42	"	"				ナデ		赤褐色	"	砂粒	
43	"	"				ハケメのちナデ ハケメ		"	"	白色粒	
44	"	"				ハラミガキ		橙褐色	"	赤色粒	
45	"	"				"		赤褐色	"	砂粒	
46	"	"				ナデ ハラナデ		橙褐色	"	白色粒	
47	"	"				ハラミガキ しづり目		"	"	"	
48	"	"				ハラナデ タ		"	"	"	
49	"	"		13.0		ハラケズリ ハケメ		"	"	白色粒	
50	"	"				ハラケズリ しづり目		明褐色	"		
51	"	"				ハラミガキ ハラナデ		橙褐色	"	雲母	
52	"	"				ハラミガキ ハケメ		"	"	砂粒	
53	"	"				ハラミガキ ナデ		"	"	"	
54	"	要	12.0	4.0	18.0	ハケメ		"	"	金色雲母	
55	"	"	14.4			"		暗褐色	"	赤色粒	
56	"	"	14.0			"		褐色	"	金色雲母	
57	"	"	13.0			ハケメのちナデ		橙褐色	"	小石	
58	"	"	16.0			ハケメ		"	"	金色雲母	
59	"	"	14.0			"		褐色	"	"	
60	"	"				ナデ		黑色	"	"	
61	"	"			6.0	ハラナデ ハケメ		褐色	"	"	

第1表第I地点出土遗物觀察表(4)

## 第II章 第II地点

### 1. 調査経緯

- 平成3年1月19日 文化庁に発掘届提出  
平成3年1月28日 発掘調査を開始  
平成3年2月4日 発掘調査終了  
平成3年2月15日 南甲府警察署に遺物発見届を提出

### 2. 遺跡の概要と層位

第II地点は、東八代郡豊富村高部1398～1401に所在し、台地東側の傾斜地である。調査方法は、調査対象地に任意に2m×10mを7か所、2m

×8mを1か所の計8か所にトレンチを設定して掘り下げた。

本地点の基本層序は、次のとおりである。

第I層	褐色土層（表土）	第IV層	黄褐色ローム層	
第II層	〃	（耕作土）	第V層	明褐色土層
第III層	暗褐色土層			

### 3. 検出された遺物

第II地点では、遺構は検出されず、若干の縄文土器片や黒曜石が耕作土から出土したにすぎなかった。

### 4. まとめ

調査地は、東側に向かって下る比較的急な傾斜地であり、遺跡の範囲外になると思われる。

## 第III章 第III地点

### 1. 調査経緯

- 平成3年3月25日 文化庁に発掘届提出  
平成3年3月28日 発掘調査を開始  
平成3年4月4日 発掘調査終了  
平成3年4月5日 南甲府警察署に遺物発見届を提出

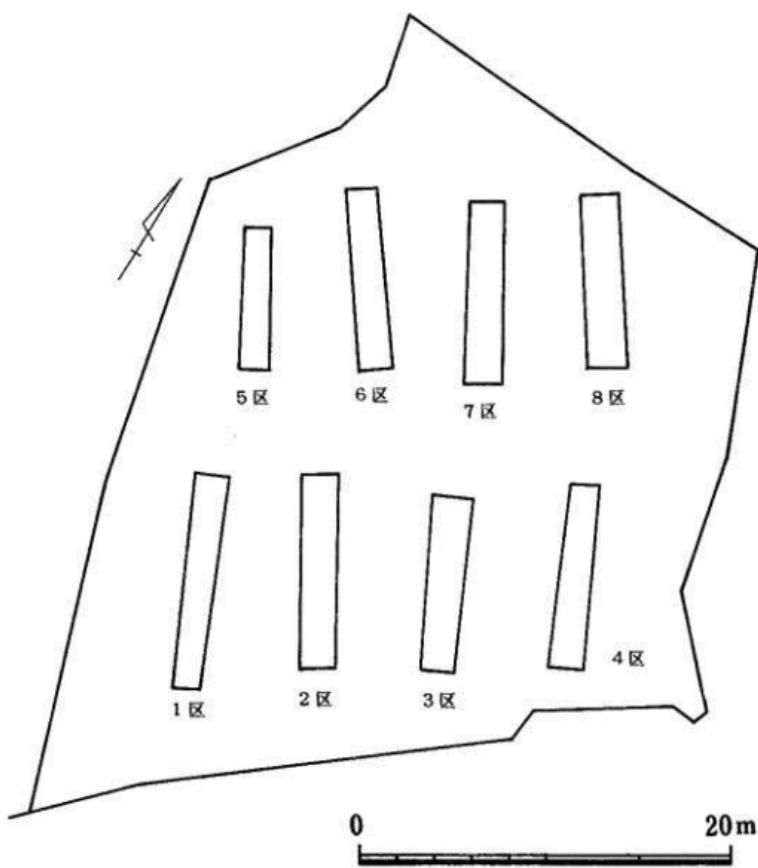
### 2. 遺跡の概要と層位

第III地点は、東八代郡豊富村高部1415-1番地に所在し、台地北側の北方向に下る傾斜地に立地する。調査方法は、調査対象地の西

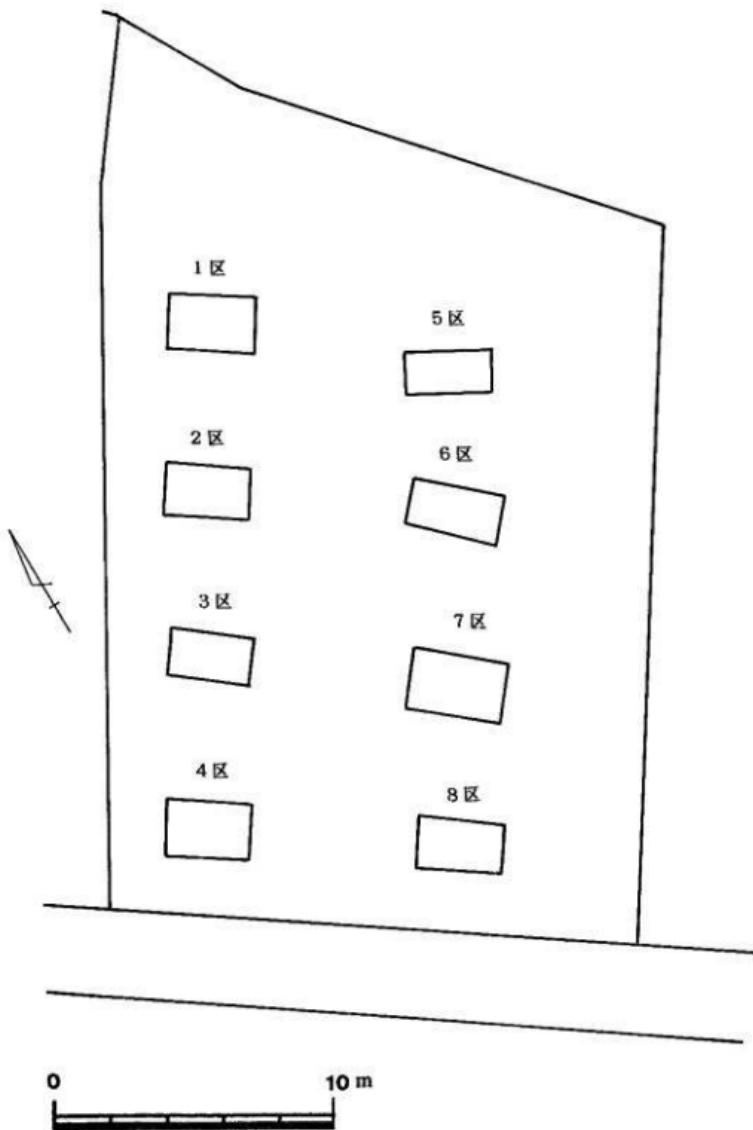
側に任意に2m×3mの4か所の試掘坑を1～4区とし、掘り下げた。

本地点の基本層序は、次のとおりである。

第I層	褐色土層（表土）	第IV層	黒褐色土層	
第II層	〃	（耕作土）	第V層	黄褐色ローム層
第III層	暗褐色土層			



第9図 第II地点全体図(1/300)



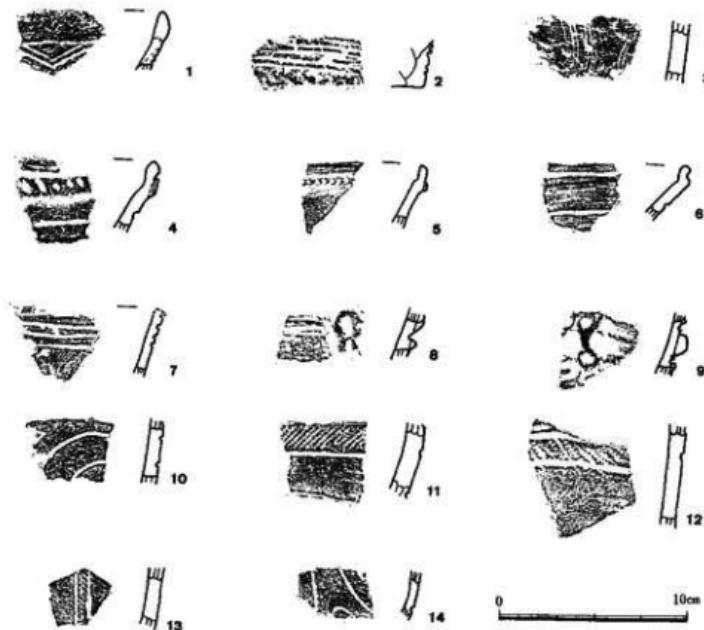
第10図 第Ⅲ地点全体図(1/200)

### 3. 検出された遺物（第11図）

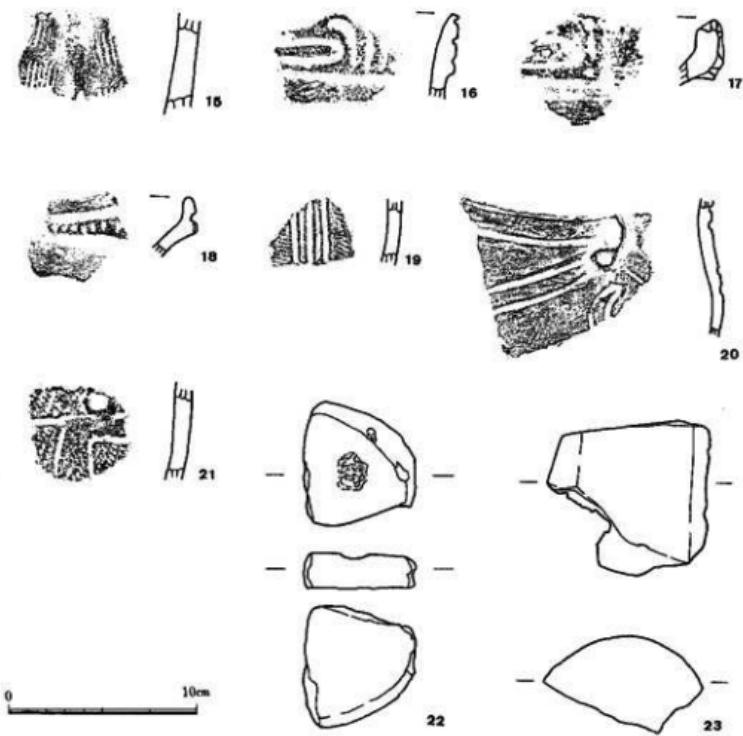
第III地点では、ローム面は耕作で荒されており、遺構は検出されなかった。出土遺物は、耕作土から縄文時代前～後期の土器が出士した。

### 4. まとめ

本地点は、多数の縄文土器が表面で見られ、遺構の検出が期待されたが、耕作により攢乱されており、遺構は発見できなかった。調査対象地の東半部は、作物の植えつけにより、平成3年度の8月に行うこととした。



第11図 第III地点出土遺物(1)(1/3)



第12図 第III地点出土遺物(2)(1/3)

第5表第III地点出土遺物觀察表(1)

番号	出土地	器形	法量(cm)			調整	文様	色調	焼成	胎土	備考
			口径	底径	高さ						
1	1区						半截竹管による沈線文	褐色	良	砂粒	前期中期 ～後期後葉
2	*						平行沈線文	橙褐色	好	金色雲母	初期 末葉？
3	表採						鈎曲状工具による沈線	〃	好	小石	中期後葉
4	*						刻目凸帯	明褐色	好	白色粒	後期前葉
5	2区					〃		橙褐色	好	〃	〃
6	*						横走沈線	〃	好	白色粒	後期前葉
7	*						4本の沈線の下に縹文 L R	〃	好	砂粒	〃
8	*						8の字文	〃	好	白色石粒	〃
9	1区					〃		黒褐色	好	〃	〃
10	*						沈線文	暗褐色	好	白色粒	〃
11	表採						沈線区画内に縹文 L R	赤褐色	好	雲母	後期初葉
12	2区						平行沈線の間に縹文 R L	橙褐色	好	砂粒	〃
13	1区						2本の沈線の間に縹文 R L	黒褐色	好	白色粒	後期前葉
14	*						沈線文	褐色	好	雲母	〃
15	6区						鈎曲状工具による沈線	橙褐色	好	金色雲母	中期前葉
16	*						沈線文	褐色	好	白色粒	後期前葉
17	*						8の字文	橙褐色	好	白色粒	〃
18	8区						刻目凸帯	褐色	好	砂粒	〃
19	表採						5本の沈線の両側に縹 文 R	黒褐色	好	赤色粒	〃
20	5区						沈線文	橙褐色	好	雲母	〃
21	*						縹文地に沈線	〃	好	金色雲母	〃
22	6区	凹石					残存長 6.0cm 幅 7.6cm				
23	4区	石棒？					残存長 8.2cm 幅 8.6cm				



第I地点1号住居址



第I地点2号溝



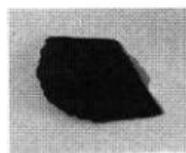
壺



小形壺



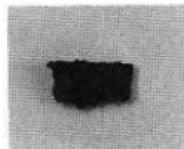
碗



砥石



高杯



鐵製品



2号溝出土高杯

## 平成 3 ~ 4 年度 高部宇山平遺跡の調査

### 調査組織

調査主体 豊富村教育委員会  
調査担当者 岡野秀典  
事務局 渡辺昭雄（教育長）・有泉善博（教育課長 平成 3 年 12 月 31 日退任）・中込清彦（教育課長 平成 4 年 1 月 1 日就任）・田中正八（社会教育係長）・今井賢・有泉妙・河野義男・大村俊枝  
調査参加者 中沢清・桜井幸子・石原次代・石原花子・山口清子（順不同）

### 第 I 章 第 III 地点

#### 1. 調査経緯

平成 3 年 8 月 1 日 文化庁に発掘届提出  
平成 3 年 8 月 7 日 発掘調査を開始  
平成 3 年 8 月 9 日 発掘調査終了  
平成 3 年 8 月 10 日 南甲府警察署に遺物発見届を提出

して設定し、掘り下げる。

本地点の基本層序で、前回の第 IV 層とした黒褐色土は、見られなかった。

#### 2. 遺跡の概要と層位

平成 2 年度に行った第 III 地点の東半部で、調査方法は、調査対象地に任意に  $2 \text{ m} \times 3 \text{ m}$  を 3 か所、 $1.5 \text{ m} \times 3 \text{ m}$  を 1 か所の計 4 か所の試掘坑を 5 ~ 8 区と

#### 3. 検出された遺物（付編 1 第 12 図）

後世の擾乱ばかりで、遺構は見つからなかった。出土遺物は、耕作土や擾乱の中から縄文時代後期を中心とした土器片が出土した。

#### 4. まとめ

本地点では、遺構は確認されなかったが、縄文時代後期の堀之内式土器を中心に、前～中期の土器も出土した。本地点は、これより南に広がる平坦地の北端にあたり、恐らくこの南側に集落が分布するのではないだろうか。

## 第II章 第IV地点

### 1. 調査経緯

- 平成3年10月1日 文化庁に発掘届提出  
平成3年10月14日 発掘調査を開始  
平成3年10月15日 発掘調査終了  
平成3年10月16日 南甲府警察署に遺物発見届を提出

意に1.5m×15mのトレンチを2本設定して掘り下げた。

本地点の基本層序で、次のとおりである。

第I層 暗褐色土層（耕作土）

第II層 黄褐色ローム層

### 3. 検出された遺物

遺構は検出されず、縄文土器や土師器の破片が10数点出土した。

### 4. まとめ

本地点では、遺構は検出されず、調査地のすぐ東側は、東方向に下る急傾斜地であり、地形からも遺跡は、調査地より西側及び南側に分布するものと見られる。

## 第III章 第V地点

### 1. 調査経緯

- 平成3年11月2日 文化庁に発掘届提出  
平成3年11月12日 発掘調査を開始  
平成3年11月27日 発掘調査終了  
平成3年12月3日 南甲府警察署に遺物発見届を提出

意に1.5m×7mを1本、1.5m×20mを2本、1.5m×12mを1本の計4本のトレンチを設定して掘り下げた。

本地点の基本層序は、次のとおりであるが第III～VII層は谷状地形の堆積上であり、最深部は、地表より3.6mを測る。

第I層 黄褐色土層（耕作土）

第II層 暗褐色土層

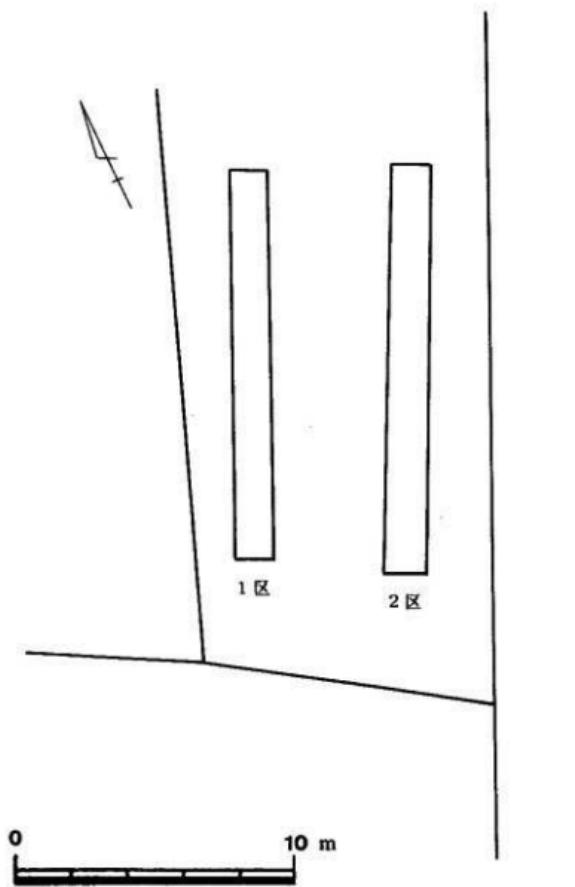
第III層 暗褐色土層

第IV層 黒褐色土層

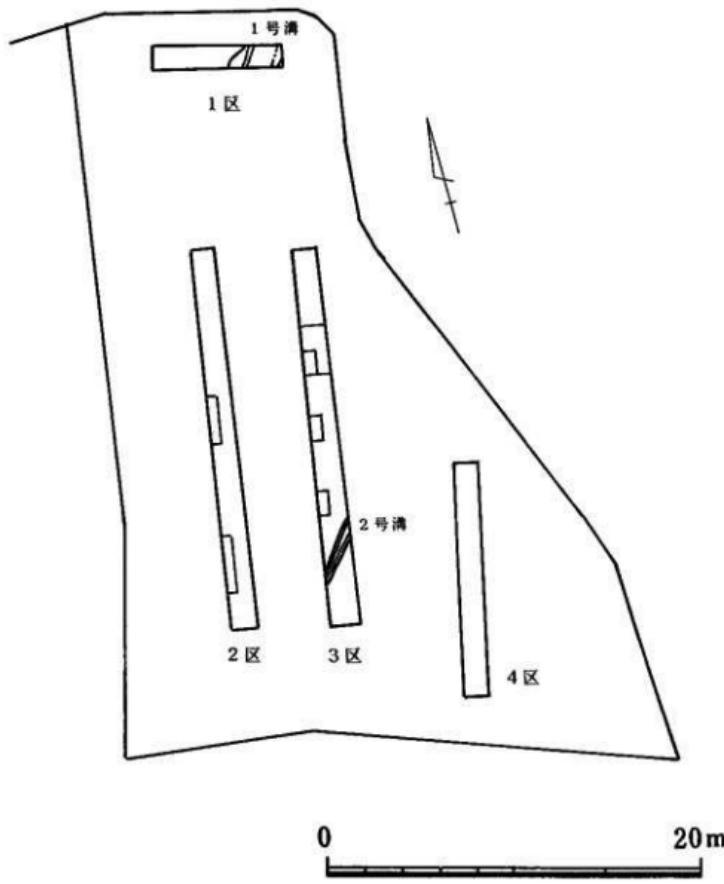
### 2. 遺跡の概要と層位

第V地点は、東八代郡豊富村高部1423に所在し、台地の北端で北方向に下がっていく傾斜地である。

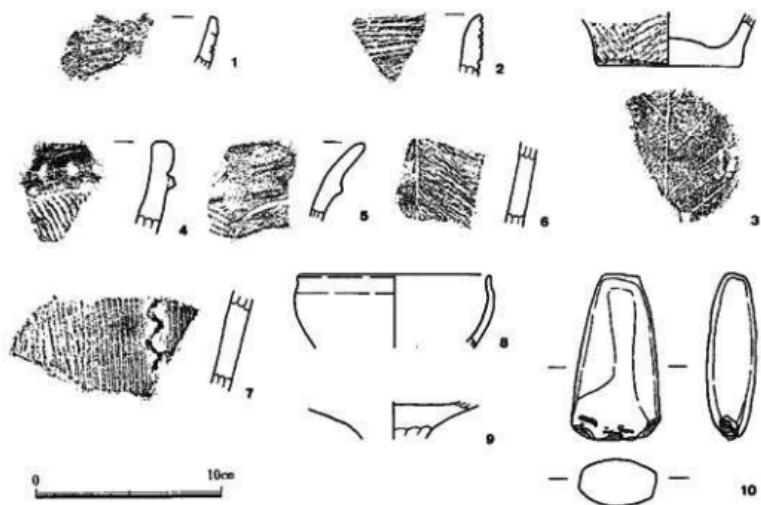
調査方法は、調査対象地に任



第1図 第IV地点全体図(1/200)



第2図 第V地点全体図(1/300)



第3図 第1地点1号住居址(1/60)

第1表第V地点出土遺物観察表

番号	出土地	器形	法量(cm)			調 整	文 様	色 調	焼 成	胎 土	備 考
			口徑	底径	高さ						
1	2号溝						半截竹管による通常押 圧	赤褐色	良	砂粒	前期後葉
2	2区						半截竹管による沈線文	茶褐色	〃	〃	〃
3	2号溝						羽状繩文	褐色	〃	金色雲母	〃
4	3区						凸帯の上部に円形刺突 下部に繩文R	赤褐色	〃		中期後葉
5	〃						凸帯の下に繩文RL	橙褐色	〃	砂粒	〃
6	〃						縦位の沈線区画に繩文 R	〃	〃	〃	〃
7	〃						条縦地文に蛇行繩文	薄褐色	〃	砂粒	〃
8	2号溝	土器 刷				ミガキ ヘラナデ		赤褐色	〃	密	
9	〃	高杯				ナデ ハケメ		橙褐色	〃	〃	
10	〃	磨製石斧					長さ 8.9cm 幅 4.8cm				

第V層 暗褐色土層（ローム含む）	第VII層 黄褐色土層（ソフトローム）
第VI層 暗褐色土層	第IX層 黒色土層
第VII層 黒色土層（粘性あり）	第X層 暗黄褐色土層（ハードローム）

### 3. 検出された遺構と遺物

#### (1) 1区

##### 1号溝

調査区東側にある南北方向に走る溝状を呈し、幅290cm以上、深さ110cmを測る。出土遺物は、縄文土器片と古墳時代前期の碗の口縁部が出土した。

#### (2) 3区

##### 2号溝（第3図）

調査区南側にあり、北東～南西に走る。幅は、30～50cmで北側が幅広くなる傾向があり、深さ30cmである。人工的なものではなく、自然水路的なものと思われる。土器の細片が3点ほど出土した。

### 4. まとめ

本地点は、現在は、なだらかに北に下る傾斜地であるが、3区で深い落ち込みが確認され、旧地形の谷跡と思われ、この谷の堆積土と同じ土が2区でも見られ、さらに西に広がるものと思われる。

## 第IV章 第VI地点

### 1. 調査経緯

平成4年4月9日	文化庁に発掘届提出
平成4年4月13日	発掘調査を開始
平成4年4月15日	発掘調査終了
平成4年4月20日	南甲府警察署に遺物発見届を提出

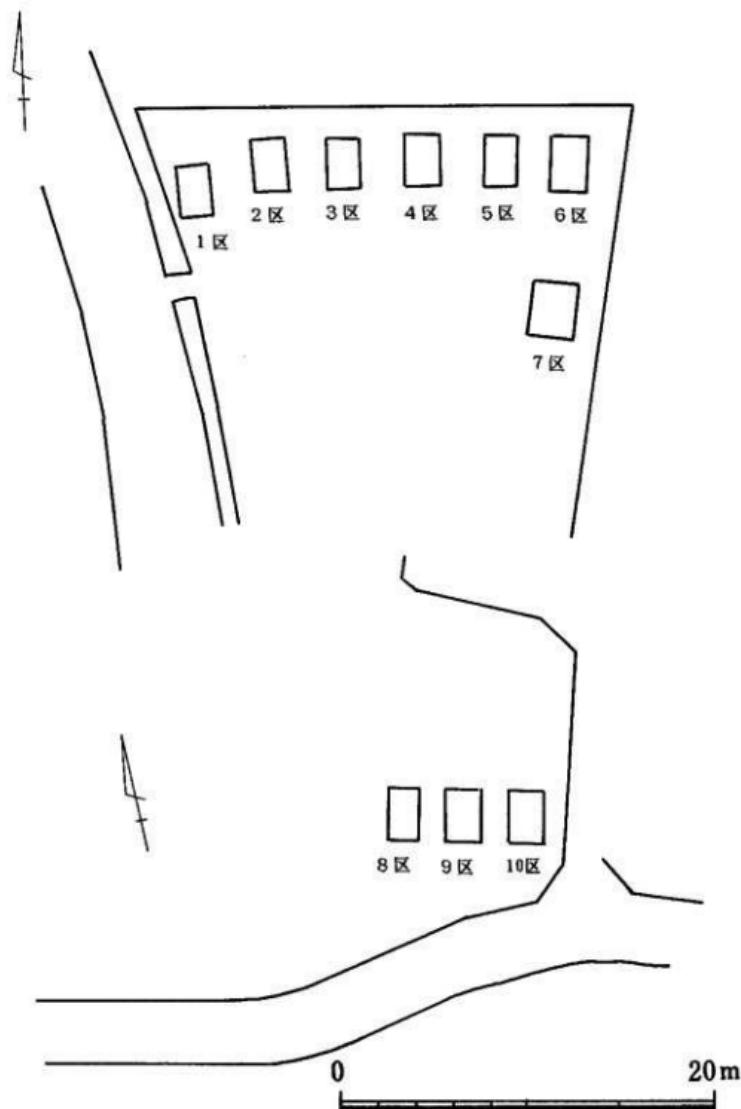
### 2. 遺跡の概要と層位

第VI地点は、東八代郡豊富村高部1436-1、1440-1に所在し、台地北端の北方向になだらかに下る傾斜地である。
---

調査方法は、調査対象地に任意に2m×3mを8か所、1.5m×3mを1か所、2.5m×3mを1か所の計10か所の試掘坑を設定して掘り下げた。

本地点の基本層序は、次のとおりである。

第I層	褐色土層
第II層	暗褐色土層
第III層	褐色土層
第IV層	黄褐色ローム層



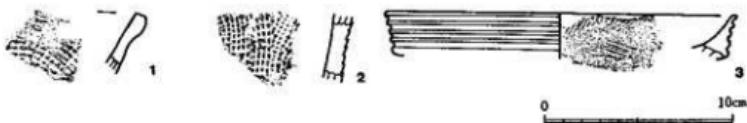
第4図 第VI地点全体図(1/300)

### 3. 検出された遺物（第5図）

遺構は確認できず、耕作土から縄文土器、土師器、水晶の破片が出土した。また、縄文時代前期後葉の諸種c式土器や棒状浮文をもつ弥生時代後期の壺の口縁部などが表採できた。

### 4. まとめ

本地点は、過去に土砂採取を受けており、耕作土が平均30cmと薄かった。遺構は確認できず、この時に削平されたものもあるであろう。



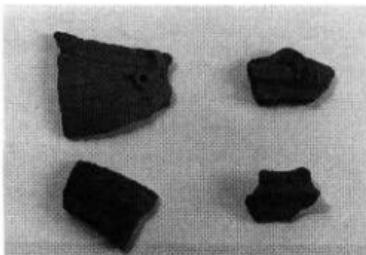
第5図 第VI地点出土遺物(1/3)

第2表第VI地点出土遺物観察表

番号	出土地	器形	法量(cm)			調 整	文 样	色調	焼成	胎 土	備 考
			口径	底径	高さ						
1	表採						結節状沈縦文	褐色	良	砂粒	前期後葉
2	"						"	"	"	"	"
3	"	弥生土器 壺	18.6				平行沈縦(縦状浮文の 跡あり) 羽状縦文	橙褐色	"	赤色粒	



第III地点



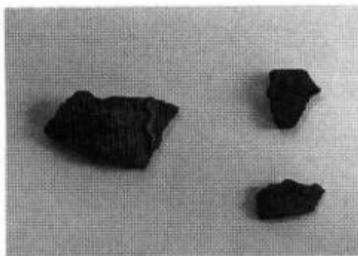
第III地点出土土器



第III地点出土石棒



第V地点



第V地点出土土器



第V地点出土磨斧

---

豊富村埋蔵文化財調査報告第1集

高部宇山平遺跡

印刷日 1993年3月20日

発行日 1993年3月31日

発行所 豊富村教育委員会

〒400-15 山梨県東八代郡豊富村大鳥居3800

印刷所 (株)エンドレス

〒405 山梨県山梨市上石森123

---

